研究主題

仲間との動きを習得する生徒を育てる『中期』バレーボールの学習指導

－活動マニュアルカードを活用した単元構成の工夫を通して－

Ⅰ　主題・副主題の意味

１　「仲間との動きを習得する」とは

バレーボールの学習において、仲間と練習やゲームに取り組み、仲間との連携により、「体力」や「基本的な技能」を習得し、ラリーを継続させていく「動ける体」をつくることである。

仲間との連携により、ラリーを継続させていく「動ける体」をつくるためには「体力」や「基本的な技能」を高めるとともに、「ゲーム感覚」を養うことが重要である。

（１）「体力」について

「体力」とは、調整力、全身持久力、瞬発力等、体を動かすための基礎となるものであり、『中期』では主に全身持久力を高めることが適している段階とされている。しかし、この「体力」は、様々な運動体験を通して、総合的に身に付くもので、「体育科教育平成２０年６月号：新学習指導要領と体育（中央教育審議会専門部会委員　佐藤 豊 氏)」にも「体力は、学習した結果として体力の向上を図ることができるような指導の在り方を重視する」とある。

したがって、本研究では、バレーボールの学習を通して「動ける体」をつくることで、全身持久力の向上を含めたバランスのよい体力向上を図る。

（２）「基本的な技能」について

「基本的な技能」とは、「動ける体」をつくるための基となる身体能力を支えるものであり、『中期』では以下のような技能とする。

【個人的技能：パス、サービス】
「ボール操作」→オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、アンダーハンドサービス
「ボールを持たないときの動き」→準備姿勢（構え方）
【集団的技能　：　パス攻撃、３段攻撃】
「ボール操作」→レシーブ、トス、アタック（スパイク）
「ボールを持たないときの動き（定位置に戻るなどの動き)」→相手の攻撃に備える準備姿勢（ポジション取り）

（３）「ゲーム感覚」について

「ゲーム感覚」とは、ゲームの様々な場面や状況に応じて、自分の体を動かすために必要な感覚であり、『中期』における「ゲーム感覚」を「自分と仲間」との関係に重点を置いて考える。

２　「仲間との動きを習得する生徒を育てる『中期』バレーボールの学習指導」とは

仲間との連携により、ラリーを継続させていく「動ける体」をつくるための個人的技能や集団的技能を高めるとともに、「自分と仲間」との関係に重点を置いた『中期』のゲーム感覚を養わせることである。

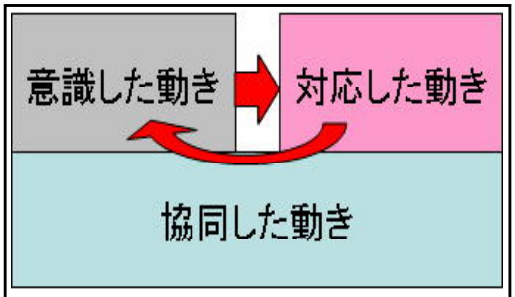
「自分と仲間」との関係に重点を置いた『中期』の「ゲーム感覚」とは、仲間と連携したプレーをするために、仲間の動きや仲間からのパス、仲間へのパスに応じて自分の体を動かすために必要な感覚である。

『中期』バレーボールの学習における「動ける体」をつくるために、「自分と仲間」との関係から【協同した動き】【意識した動き】【対応した動き】を身に付け、仲間との動きの習得を目指す。そこで、仲間との動きを習得する生徒の具体的な姿を「態度」「知識、思考・判断」「技能」の３つの観点から、以下のように設定する。

【協同した動き】「態度」 ○自己の役割を果たし、仲間との練習・ゲームに協力して取り組むことができる生徒
【意識した動き】「知識、思考・判断」 ○技能の名称や行い方を理解し、仲間と課題解決に向けた練習を決定・工夫できる生徒
【対応した動き】「技能」 ○自己の課題に応じた技能を習得し、仲間と連携したプレーができる生徒

この３つの生徒の姿「動き」は、学習過程で単独に表出するものではなく、常に相互に相関関係を保ちながら身に付いていくものと考える。

その関係は、「仲間との動き」における【協同した動き】を土台にすることにより【意識した動き】がより活性化され、その結果【対応した動き】が高まると考える**【資料１】**。



【資料１：目指す生徒の姿における相関関係】

また、本研究では仲間との関係を深めつつ、目指す生徒に迫るために、この「仲間との動き」を技能に関する「動き」のみではなく、話し合い活動などの交流も「仲間との動き」として捉えることにする。

３　「活動マニュアルカード」とは

「学びシート」と「習得シート」で構成されており、仲間との教え合いによる課題解決学習に必要な「知識、思考・判断」を支援するものである。

（1）「学びシート」について

仲間とともに課題解決学習を進めていく上で、「知識」や「学び方」を身に付けておくことは重要である。そこで、「学びシート」では、学習に取り組む手順を示し、【協同した動き】や【意識した動き】を身に付けることができるようにする。さらに、技能に関する「知識」についても資料として載せ、技能を高めるために必要なポイントを確認しながら学習できるようにする。

「学びシート」には、「個人的技能の習得」「集団的技能の習得」「技能の活用」用の３種類のシートがあり、学習の段階に応じて活用していく。

（2）「習得シート」について

身につけた技能を「習得シート」に記録させていくことで、技能における伸びが確認できるとともに、自分の課題を明確にでき、【対応した動き】を身に付けることができるようにする。

４　「活動マニュアルカードを活用した単元構成の工夫」とは

バレーボールの学習を「個人的技能の習得段階」「集団的技能の習得段階」「技能の活用段階」の３つの段階で構成し、各段階に活動マニュアルカードを活用したペア・トリオ・チーム学習を仕組むことである。

バレーボールのゲームは、ボールを狙ったところに打つ・返す等の個人的技能が不十分であれば、「パスをつなぐ」「ラリーを続ける」「スパイクを決める」という集団を通しての楽しさや喜びを味わうことが難しい。また、練習により身に付けた個人的技能や集団的技能も実際のゲームの中に活かさなければ意味がない。そこで、活動マニュアルカードを活用し、単元構成を工夫することで、「個人的・集団的技能の習得」からゲームの中で活かせる「技能の活用」へと段階的に「基本的な技能」や「ゲーム感覚」を身に付け、「動ける体」づくりを目指す。

尚、ペア・トリオ・チーム学習における目的と効果について、以下のように示す**【資料２】**。

学習形態	目　　的	効　　果
ペア学習	個人的技能の習得	・互いの動きを確認し合いながら練習に取り組むことができる ・ボールに触れる機会が多くなり、練習量が確保され、自己の課題に応じた練習に繰り返し取り組むことができる
トリオ学習	集団的技能の習得	・仲間とパスを回し合いながら連携したプレー（パス攻撃・３段攻撃）の練習に取り組むことができる ・パス攻撃、３段攻撃を成立させるために必要となるレシーブ・トス・アタックの習得を目指した練習にも取り組むことができる
チーム学習	個人的・集団的技能の活用	・ゲームにおけるチームの目標に応じた動きの練習に取り組むことができる ・身につけた個人的・集団的技能を実際のゲーム場面で活かすことができる

【資料２：ペア・トリオ・チーム学習の目的と効果】

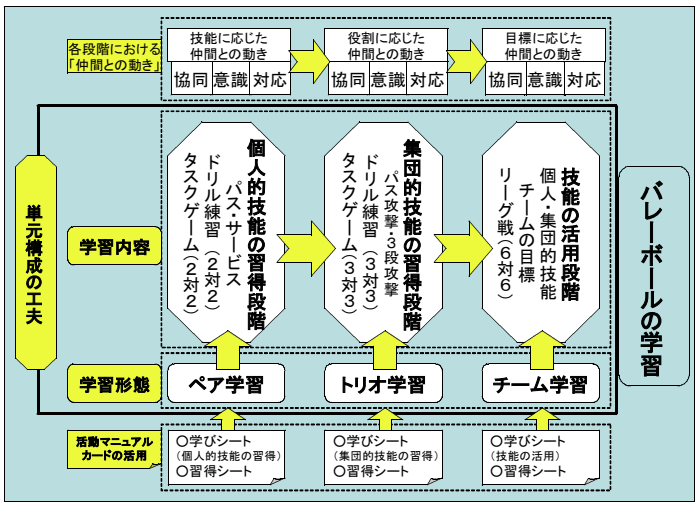
【資料３】は、各段階において目指す仲間との動きと活動マニュアルカードを活用した単元構成の工夫を示したものである。

（１）「個人的技能の習得段階」について

ペアによる活動マニュアルカードを活用した学習により、個人的技能（パスやサービス）の習得を目指す。また、２対２のタスクゲームを通じて、習得した個人的技能を使い、仲間と繰り返しパスを回す「技能に応じた仲間との動き」の習得を目指す。

（２）「集団的技能の習得段階」について

トリオによる活動マニュアルカードを活用した学習により、集団的技能（パス・３段攻撃）の習得を目指す。また、３対３のタスクゲームを通じて、レシーブ、トス、アタック（スパイク）を使った「役割に応じた仲間との動き」の習得を目指す。



【資料３：活動マニュアルカードを活用した単元構成の工夫】

（３）「技能の活用段階」について

チームによる活動マニュアルカードを活用した学習により、個人的・集団的技能の定着を目指す。また、６対６のゲーム（リーグ戦）を通じて、パス攻撃や３段攻撃などを使った「目標に応じた仲間との動き」の習得を目指す。

Ⅱ　副主題の設定理由

１　生徒の意識発達の面から

スイスの心理学者ピアジェ（1896~1980）が示す知的発達の段階によると、『中期』では形式的操作段階にあたるとされている。この形式的操作段階とは、「自己編集能力（いろいろな事柄を一度自分の思考の根拠地で受け止めて自分なりのやり方で組み立て直して表現する、仲間を意識し比較して自分を評価する）」・「計画的思考（作戦を立てて遊ぶ計画性などもあげられる）」の獲得、また、遊びが組織的継続的になり、忍耐力の必要なスポーツ活動を展開することができる段階である。そのため、ある程度仮説を立て、試行錯誤していきながら、自分なりのやり方や計画を立てることができる段階であると考える。これを学習場面に置き換えると、「自ら課題をもち、練習を工夫しながら解決していく学習活動」を仕組むことが有効であると考える。

また、情意面の発達により、自分の感情や意志を上手に表現して人に伝えたりすることができるようになる。さらに、社会性も発達していくため、仲間とかかわり合う中で協調性や責任感が身に付いてくる。しかし、自ら課題解決学習に取り組むための経験や知識が不十分である。したがって、学習に対する「学び方」や技能に関する「知識」についての支援を行うとともに、仲間とのかかわりによって、課題を解決していく学習方法を仕組むことが重要であると考える。

このようなことから、活動マニュアルカードを活用した教え合いによる課題解決学習を仕組むことは、意識発達の面からも技能を習得させる上で大変有効であると考えるとともに、コミュニケーション能力を養うことにもつながると考える。

２　生徒の実態から

本学級の生徒たちは、運動に対する関心・意欲が高く、特に球技には意欲的に取り組むことができる。事前アンケートの結果からも「球技が好きである」と答えた生徒は１００％、「バレーボールが好き」と答えた生徒は７１．４％であり、球技に対する関心・意欲の高さが伺える。また、「球技やバレーボールが好き」と答えた理由として、「ボールを扱える」「チームプレーが楽しい」等が挙げられている。しかし、「バレーボールが好きではない」と答えた生徒の理由として、「パスが上手くできない」「友達とうまく協力（連携）ができない」等が挙げられている。これは､パスやサービス等の基本的な技能を十分に習得することができていないためだと考える。

また、基本的な技能を習得した生徒でもゲーム感覚を養うことができていないため、実際のゲーム場面において自己の能力を発揮できず、楽しさを味わうことができていないと考える。

そこで、単元構成の工夫により、学習内容を「単純なものから複雑なもの」へと段階的に配置し、基本的な技能の定着を図る。さらに、学習方法として「ペア・トリオ・チーム学習（学習形態)」を仕組むことで、技能の習得や仲間との連携した動きに必要となる「自分と仲間」との関係、すなわち「ゲーム感覚」を養うことができるようにする。

以上のことから、活動マニュアルカードを活用し、教え合いによる課題解決学習を仕組み、段階的に技能の習得やゲーム感覚を養う単元構成を工夫することは、主題で目指す生徒に迫る上で大変有効であり、『中期』における「動ける体」を育成することにつながると考え、本副主題を設定している。

Ⅲ　研究の目標

仲間との動きを習得する生徒を育成するために、活動マニュアルカードを活用した単元構成の在り方を究明する。

Ⅳ　研究の仮説

バレーボールにおける「動ける体」づくりの学習において，活動マニュアルカード（着眼点Ⅰ）を活用した②単元構成の工夫（着眼点Ⅱ）を行えば，土台となる【協同した動き】や【意識した動き】【対応した動き】が高まり、「仲間との動きを習得する生徒」が育つであろう。

着眼点Ⅰ：　課題解決学習に必要な知識や思考・判断、仲間との教え合いなどの活動を支援するために、「学びシート・習得シート」を仕組む。

着眼点Ⅱ：　「技能」の習得と「ゲーム感覚」を養うために、単元構成を「個人的技能の習得段階」「集団的技能の習得段階」「技能の活用段階」の３つに分け、各段階に応じたペア・トリオ・チーム学習を仕組む。

Ⅴ　研究の具体的構想

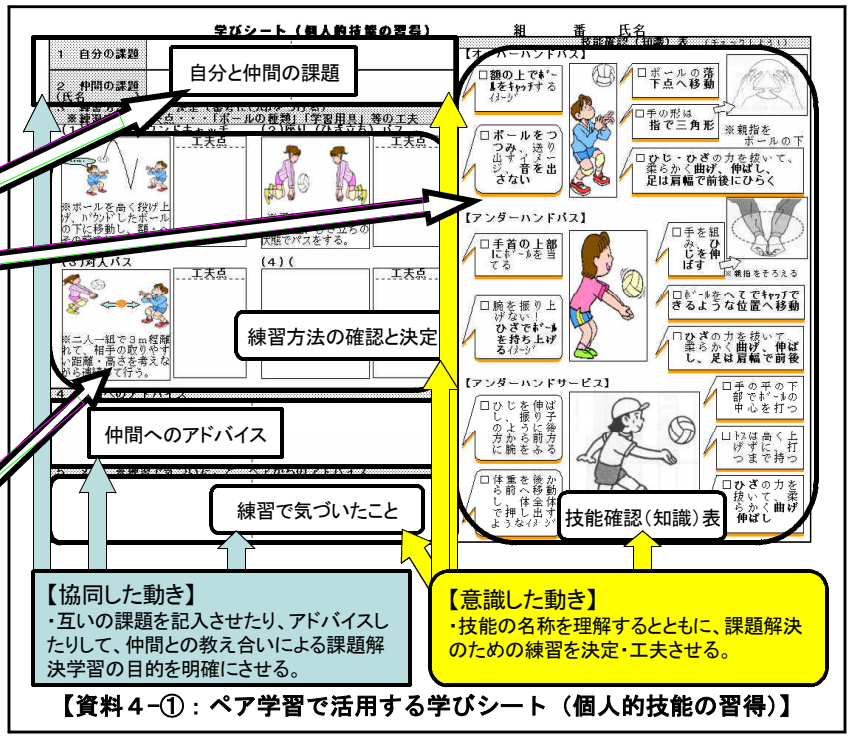
１　活動マニュアルカード（着眼点Ⅰ）

表面が「学びシート」、裏面が「習得シート」となり、仲間との教え合いによる課題解決学習時に活用する。また、「学びシート」については、単元の各段階毎に（「個人的技能の習得段階」「集団的技能の習得段階」「技能の活用段階」）応じたものを活用する。「習得シート」については、単元を通じて記録していくものであり、技能に関する自己の伸びを確認するとともに学習の課題を明確にすることができる。各段階で活用する「学びシート」と「習得シート」を以下のように示す。

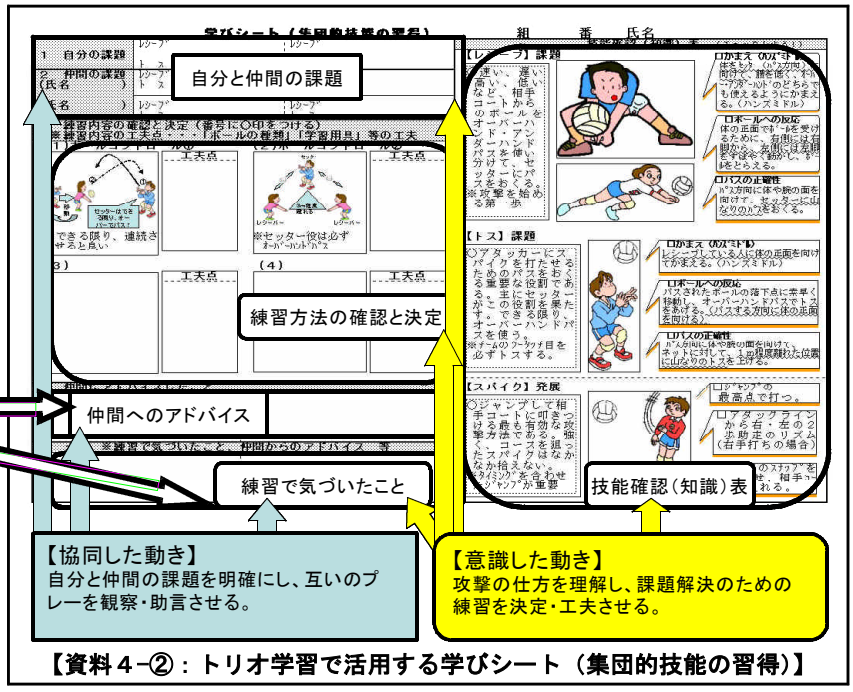
（１）「学びシート」について

「個人的技能の習得段階」では、ペア学習、「集団的技能の習得段階」では、トリオ学習に取り組ませる。

そこで、まず「学びシート」の技能確認表（右半分）から自分の課題を設定させ、その内容は仲間と共有させる。次に、その課題を解決するための方法を仲間と話し合い、「学びシート」や補助資料の例示を参考に練習方法を選択させる。その際、自分たちで考えた工夫点（例示の内容を自分たち用にアレンジし、発展させる）についても記入させる。このようにして考案した練習を、ペアやトリオで交流しながら行わせることで【協同した動き】や【意識した動き】ができるようになると考える。最後に練習やゲームの中での仲間とのアドバイスや気づいたことを記入させ、次時の練習に活かしていくことができるようにする**【資料４−①②】**。



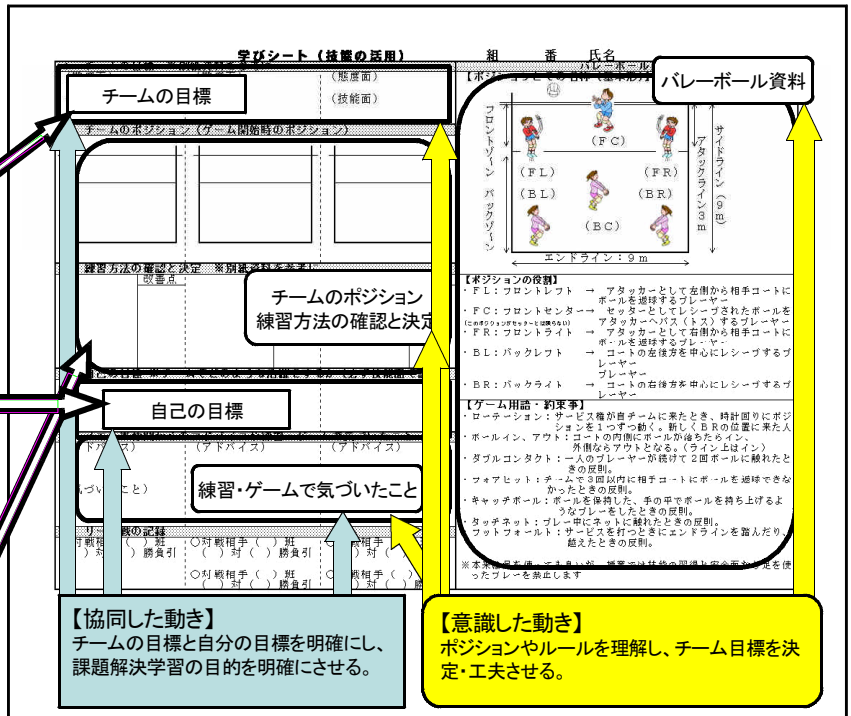
【資料４−①：ペア学習で活用する学びシート（個人的技能の習得）】



【資料４−②：トリオ学習で活用する学びシート（集団的技能の習得）】

「技能の活用段階」では正式人数６人によるチーム学習に取り組ませる。

そこで、まず、「学びシート」を活用し、チームと個人の目標を明確にさせる。チームの目標を技能面と態度面（チームワーク）の両面で設定させ、個人の目標を「チームのために個として何ができるか」について、技能の面で設定させる。次に、ポジションや練習方法を補助資料から選択させ、必要に応じて工夫・発展させる。



【資料５：チーム学習で活用する学びシート（技能の活用）】

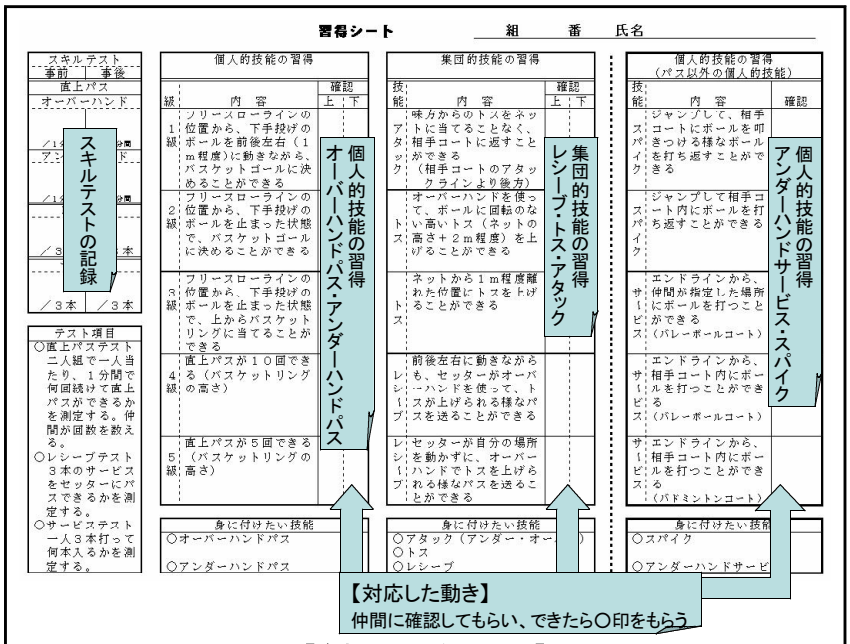
このような練習をチームで協力して課題解決的に行わせることで、【協同した動き】や【意識した動き】ができるようになると考える**【資料５】**。

これら一連の仲間との教え合いによる課題解決学習により、「技能・役割・目標に応じた仲間との動き」を高めていくことができると考える。

（２）「習得シート」について

「習得シート」は、各項目について仲間から技能の確認をしてもらうシートであり、「ペア学習」「トリオ学習」、「チーム学習」の各段階を通して活用する**【資料６】**。

また、習得した個人的・集団的技能を「習得シート」に記録していくことで、自己の技能に関する伸びが確認できるとともに、学習の課題を明確にすることができ、【対応した動き】ができるようになると考える。



【資料６：習得シート】

２　単元構成の工夫（着眼点Ⅱ）

「個人的技能の習得段階」「集団的技能の習得段階」「技能の活用段階」の各段階に応じた仲間との動きを習得するために、活動マニュアルカードと学習内容・形態を単元構成の工夫として以下のように示す**【資料７】**。

段階	導　入		個人的技能の習得段階			集団的技能の習得段階			技能の活用段階			終末
動ける体			○個人的技能を習得し、技能に応じた仲間との動きができる			○集団的技能を習得し、役割に応じた仲間との動きができる			○習得した技能を活用し、チームの目標に応じた仲間との動きができる			
時間	１	２	３	４	５	６	７	８	９	１０	１１	１２
学習内容・形態	１オリエンテーション ○学習内容・方法の確認等	２課題把握 ○スキルテスト ○試しのゲーム	３　一斉学習 ①確認練習 （オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、レシーブ、サービス） ②ドリル練習 ・的当てパス ・的当てサービス ③学びシートの整理 ４　ペア学習 ①教え合い練習（課題解決） ②タスクゲームⅠ（２対２） ・対人パスゲームＡ ③学びシートの整理 ５　ペア学習 ①教え合い練習（課題解決） ②タスクゲームⅡ ・対人パスゲームＢ ・２対２ゲーム ③学びシートの整理			６　一斉学習 ①確認練習 （パス攻撃、３段攻撃） ②ドリル練習 ・三角パス ・一列パス ③タスクゲームⅢ（３対３） ・返球ゲーム ④学びシートの整理 ７　トリオ学習 ①教え合い練習（課題解決） ②タスクゲームⅣ（３対３） ・３対３ゲーム ③学びシートの整理 ８　トリオ学習 ①教え合い練習（課題解決） ②タスクゲームⅣ（３対３） ・３対３ゲーム ③学びシートの整理			９　チーム学習 ①教え合い練習 （チーム練習） ②リーグ戦①(6 対 6) ③学びシートの整理 10　チーム学習 ①教え合い練習 （チーム練習） ②リーグ戦②(6 対 6) ③学びシートの整理 11　チーム学習 ①教え合い練習 （チーム練習） ②リーグ戦③(6 対 6) ③学びシートの整理			12まとめ ○スキルテスト ○アンケート・感想
活動マニュアルカード	○カードの使い方	○記録の記入	○学びシート ・個人的技能の習得 ○習得シート ・個人的技能の習得			○学びシート ・集団的技能の習得 ○習得シート ・集団的技能の習得 ・個人的技能の習得			○学びシート ・技能の活用 ○習得シート ・集団的技能の習得 ・個人的技能の習得			○記録の記入
補助資料			・ペア学習の練習方法資料集			・トリオ学習の練習方法資料集			・チームの目標と練習内容・方法			

【資料７：単元構成の工夫】

（１）「個人的技能の習得段階」について

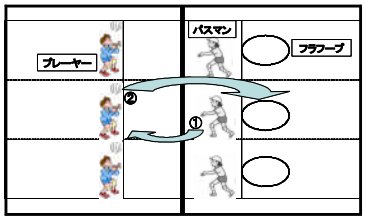
オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、アンダーハンドサービスを中心とした個人的技能を習得させる段階として、ペアでの教え合いによる課題解決学習に取り組ませる。グルーピングについては、前時に実施したスキルテストの結果をもとに、チームの構成メンバーを決定し、さらに得意（Ａ・Ｂ評価）・不得意（Ｂ・Ｃ評価）の生徒がペアとなるように教師が仕組む。この学習形態によって、より多くボールに触れ、互いの課題に応じた練習に取り組むことができる。また、不得意な生徒の技能向上に重点を置いた学習だけでなく、得意な生徒は不得意な生徒にアドバイスしていくことで、技能の構造や仕方の知識をより深いものにし、自分の動きにも活かすことができるようになると考える。さらに、ドリル練習とタスクゲーム（２対２）**【資料８】**を仕組むことにより、オーバーハンド・アンダーハンドパス、アンダーハンドサービスの習得や「ゲーム感覚」を養い「技能に応じた仲間との動き」の習得を目指す。

個人的技能の習得段階

ドリル練習

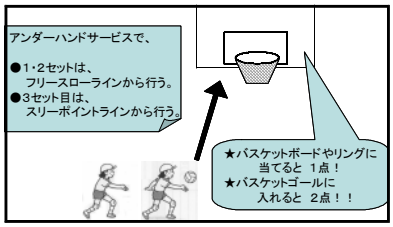
〈的当てパス〉

①パスマンは、両手でプレーヤーにボールを投げ入れる。
②プレーヤーはオーバーハンドパスでフラフープの輪の中にボールを落とす。
③すぐに、プレーヤーとパスマンが入れ替わり、ゲームを開始する。（プレーヤーがボールを拾いにいく）
④ペアで協力して、１分間に何本入れることができるかを競う。
⑤全部で４セット行い、セット間３０秒とする。
⑥１・２セットは､オーバーハンドパス、３・４セットは、アンダーハンドパスで行う。



〈的当てサービス〉

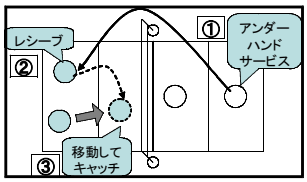
①フリースローラインから、アンダーハンドサービスでリングの輪の中をねらう。
②ペアで交互にサービスを打ち、３０秒間でボードやリングに当てることができるかを競う。
③ボードやリングに当てた場合は１点、ゴールに入った場合は、２点とする。
④３０秒（Ａ班）、１０秒（交代）、３０秒（Ｂ班）、１０秒（交代）、３０秒（Ｃ班）、３０秒（セット間）を３セット行う。ただし、３セット目については、スリーポイントラインから行う。
１つのゴールに対して、３ペアが行うため、３０秒毎に交代しておこう。



タスクゲーム

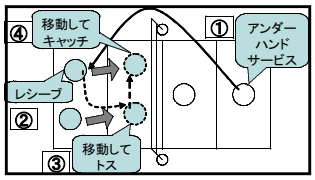
〈対人パスゲームＡ〉

①バドミントンコートを使った２対２のパスゲームである。
②サービスは、アンダーハンドパスで行い、必ず、相手チームのバックコートに入れる。失敗したときはやり直す。
③相手チームからのサービスをレシーブし、仲間がキャッチできれば１点となる。また、フロントコートでのキャッチは２点となる。レシーブの失敗やキャッチミスについては、サービスを行ったチームの得点（１点）となる。
④サービスは相手チームと交互に行う。（チーム内のペアも交互に行う）
⑤試合時間は３分間、その合計得点を競う。（３分経過とともにゲーム終了となる）



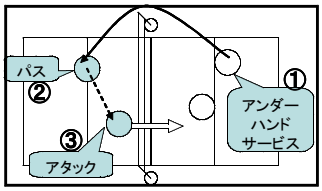
〈対人パスゲームＢ〉

①バドミントンコートを使った２対２のパスゲームである。
②サービスは、アンダーハンドパスで行い、必ず、相手チームのバックコートに入れる。失敗したときはやり直す。
③相手チームからのサービスをレシーブし、仲間がフロントコートでパスを受け、さらに、そのボールをレシーブした人にトスをする。そのトスをキャッチできれば１点、フロントコート内でキャッチできれば２点となる。フロントコート外でのキャッチは１点となる。レシーブの失敗やキャッチミスについては、サービスを行ったチームの得点（１点）となる。
④サービスは相手チームと交互に行う。（チーム内のペアも交互に行う）
⑤試合時間は２分間、その合計得点を競う。（２分経過とともにゲーム終了となる）



〈２対２ゲーム〉

①バドミントンコートを使った２対２のゲームである。
②サービスは、アンダーハンドパスで行い、必ず、相手チームのバックコートに入れる。失敗したら、相手チームの得点、ボールとなる。
③相手チームからのサービスを落とさずにパスを回し、相手コートに返す。パスの回数制限はなしとするが、１回で相手コートに返すことは禁止とする。（相手チームの得点となる）
④ボールが床に落ちた時点で、どちらか一方のチームの得点となる。（得点はすべて１点）
⑤サービスは相手チームと交互に行う。（チーム内のペアも交互に行う）
⑥試合時間は３分間、その合計得点を競う。（３分経過とともにゲーム終了となる）

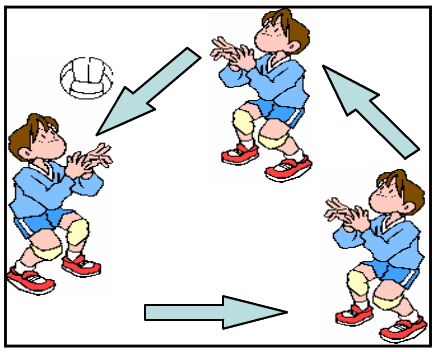
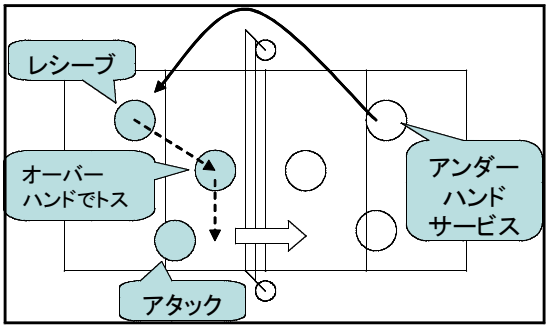
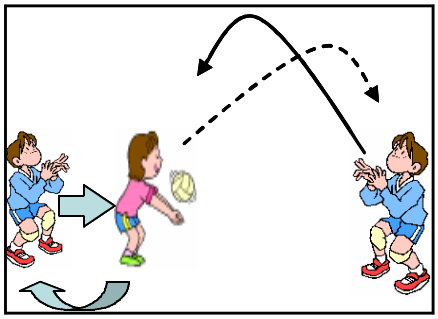
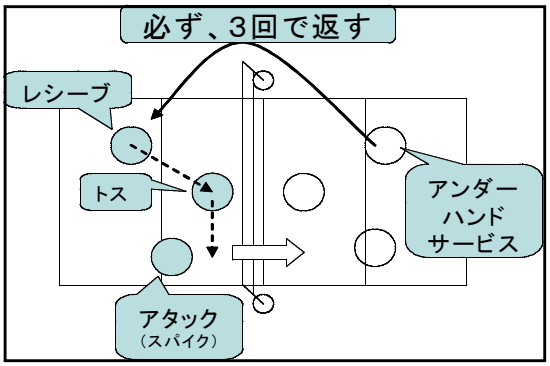


【資料８：ドリル練習とタスクゲーム】

（２）「集団的技能の習得段階」について

パス攻撃、３段攻撃による攻撃を中心とした集団的技能を習得させる段階として、トリオでの教え合いによる課題解決学習に取り組ませる。グルーピングについては、ペアで習得した技能（習得シート）をもとに、Ａ・Ｂ・Ｃ評価の生徒でトリオになるように教師が仕組む。この学習形態によってトリオによる「レシーブ・トス・アタック（スパイク）」の役割を明確にし、仲間と連携したプレー（パス攻撃、３段攻撃）の習得を目指した練習に取り組むことができる。また、ドリル練習とタスクゲーム（３対３）**【資料９】**を仕組むことにより、「レシーブ・トス・アタック」の習得や「ゲーム感覚」を養い、「役割に応じた仲間との動き」の習得を目指す。

集団的技能の習得段階

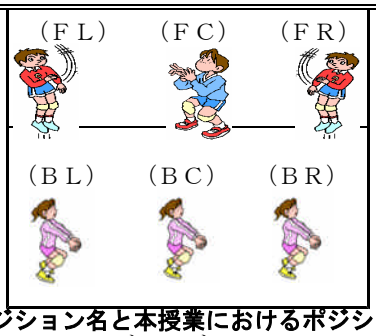
ドリル練習	タスクゲーム
〈三角パス〉 ①三角形の（２ｍ程度）位置に立ち、同じパス方法を用いて、ボールを落とさないように一定方向にパスを回す。 ②オーバーハンドパスとアンダーハンドパスをそれぞれ右回り､左回りで行う。（教師の指示で行う） ③「かまえ」「落下点への移動」「ボールのとらえ方」「パス方向への体の向き」「山なりのパス」を意識してパスを回そう！ 	**〈返球ゲーム〉** ①バドミントンコートで行う３対３のパスゲームである。 ②サービスは、必ずアンダーハンドで行い、どこをねらってもよい。 ③相手チームからのサービスをレシーブし、トスしたボールをオーバーハンドパスかアンダーハンドパスで相手コートに返したら１点とする。（必ず３回で返球する） ④一回の攻撃に対して、一人一回しかボールに触れることはできない。（役割分担） ⑤一人のプレーヤーが２回触れてしまった場合や３回で返球できない場合は、相手チームの得点とする。 ⑥サービスは相手と交互に行い、一試合６分間で、２セット行い、その合計得点で勝敗を競う。 
〈一列パス〉 ①ネットを挟んで、セッター（一人）とレシーバー（二人）に分かれ向き合い、パスをセッターに返す。 ②レシーバーはパスをしたら、後ろの列に戻り、繰り返しパスをする。 ③オーバーハンドパス、アンダーハンドパスのどちらを使ってもよい。 	**〈３対３ゲーム〉** ①バドミントンコートで行う３対３のゲームである。 ②サービスは、アンダーハンドで行う。（必ずバックコートへ） ③相手チームからのサービスを落とさずに３回（レシーブ、トス、アタック）で、相手コートに返す。１回や２回で相手コートに返すことは禁止とし、相手チームの得点とする。 ④相手コートに返すときは、スパイクを使ってもよい。 ⑤サービスを相手と交互に行い、一試合７分間で、２セット行い、その合計得点を競う。 

【資料９：ドリル練習とタスクゲーム】

（３）「技能の活用段階」について

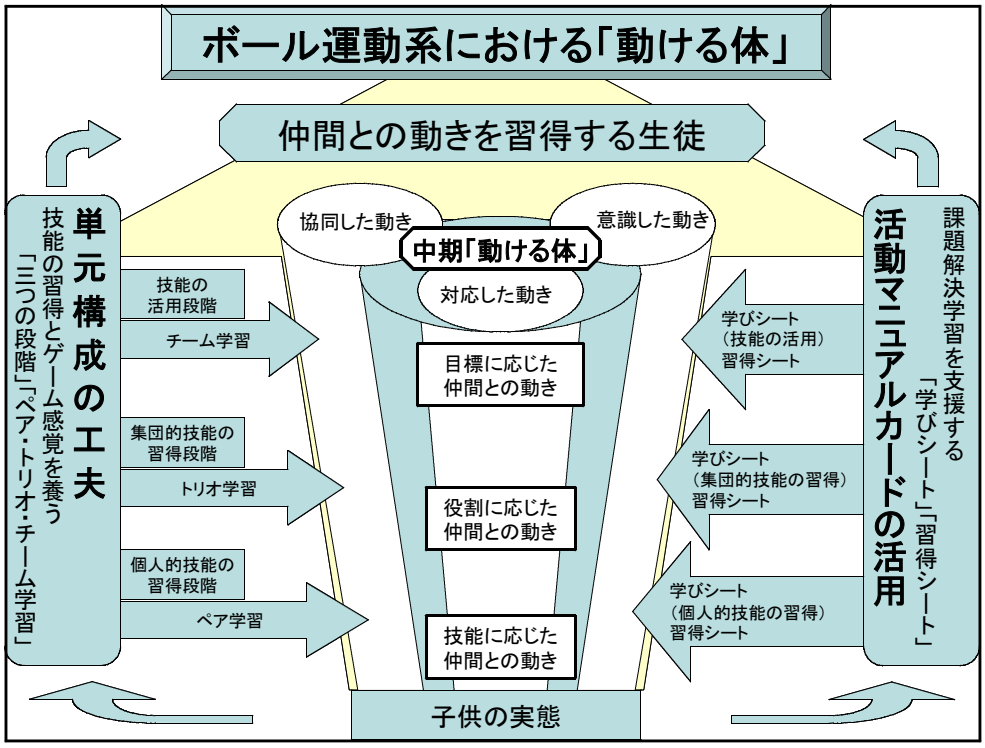
習得した個人的・集団的技能を定着させる段階として、チームで動きを確認し、習得した技能をゲームに活かす学習に取り組ませる。そのため、チームにおけるポジションや自己の役割を果たしながら、チームの目標に応じたゲーム（６対６）**【資料10】**を行うことができるようにする。この学習形態によって、パス攻撃・３段攻撃の習得や「ゲーム感覚」を養い、「目標に応じた動き」の習得を目指す。

技能の活用段階

ポジションについて	**ゲームについて**
【ポジション】  **【ポジション名と本授業におけるポジションの役割】** ・ＦＬ：フロントレフト →アタッカーとして左側から相手コートに返球する ・ＦＣ：フロントセンター →セッターとしてレシーブされたボールをアタッカーへパス（トス）する ・ＦＲ：フロントライト →アタッカーとして右側から相手コートに返球する ・ＢＬ：バックレフト →コートの左後方を中心にレシーブする ・ＢＣ：バックセンター →コートの中央部分を中心にレシーブする ・ＢＲ：バックライト →コートの右後方を中心にレシーブする	【ゲーム】 正規のルールで行うが、一部、授業ルールで行う ○時間制限（6分間）のゲーム ※ラリーポイント制 ○サービスは得点の有無に関わらず、相手チームと交互に行う ○３回のパスで返球した場合はボーナス点の加点 ○ネットの高さ（２００ｃｍ） ○ローテーション ※フロントセンターがセッターの役割をする ※スパイクはフロントプレーヤーのみ打てる ※スパイクによるバックアタックは禁止 ※７名のチームはＦＲ後はコート外へ、再びローテーションでＢＲから入る ○主な反則 ・ダブルコンタクト ・フォアヒット ・キャッチボール ・タッチネット ・サーバーのフットフォルト ※足を使ったプレーはすべて禁止 【チームの目標について】 ○チームの目標は、態度面・技能面の両面で設定する。（補助資料からの選択可） （例） ・「オーライ」の声を出す ・最後までボールを追う ・パスをつないで、パス攻撃をする ・レシーブ、トス、スパイクの３段攻撃をする　等

【資料10：リーグ戦のポジションとルール】

３　研究の構想図



4　仮説検証の方途

○目指す生徒像

（1）自己の役割を果たし、仲間との練習・ゲームに協力して取り組むことができる生徒

（2）技能の名称や行い方を理解し、仲間と課題解決に向けた練習を決定・工夫できる生徒

（3）自己の課題に応じた技能を習得し、仲間と連携したプレーができる生徒

段階			目指す生徒像	手だて	検証の方法	評価の観点
○学習前の実態調査				①事前スキルテスト	①直上パスレシーブサービス	①一人での連続パスの回数やレシーブ・サービスの成功本数の伸びが見られるか
				②事前アンケート	②質問事項に対する４段階の回答の分析	②これまでの学習で、バレーボールに対する興味・関心をもっているか
個人的技能の習得段階	協同	(1)	○互いにアドバイスを掛け合いながら目的をもった練習・ゲームに取り組むことができる	①活動マニュアルカード（学びシート）	①学びシートの課題内容やアドバイス、メモ内容の分析	①仲間からのアドバイスや技能確認表、習得シートを参考にした課題内容や仲間の技能に関する改善点が記入されているか
					①パス練習における様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	①技能確認表や習得シートを参考に、技能のチェックやアドバイスをしながら練習をしているか
				②単元構成（ペア学習）	②パス練習における様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	②技能に関するアドバイスをしながら、繰り返し課題の練習をしているか
					②ﾄﾞﾘﾙ・ﾀｽｸゲームにおける様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	②パスやサービスを連続させるために技能に関するアドバイスをしながら、ドリル・タスクｹﾞｰﾑをしているか
	意識	(2)	○技能の名称や行い方を理解するとともに互いの課題を把握し、個人的技能の習得に向けて、互いの練習方法を決定し、理解することができる	①活動マニュアルカード（学びシート）	①学びシートの練習方法やメモ内容の分析	①仲間と決定した練習方法や工夫点を記入しているか（ボールや回数、距離等を課題に応じて変化させる）
				②単元構成（ペア学習）	②練習方法を決定するための話し合いにおける様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	②自分の課題を仲間に伝え、仲間と課題に応じた練習方法の決定と工夫点について相談しているか（ボールや回数、距離等を課題に応じて変化させる）
	対応	(3)	○個人的技能を習得し、パスやサービスを使って仲間とのパスゲームができる	①単元構成（ペア学習）	①パス練習における様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	①仲間と決定した練習方法でパス技能を高めているか（構え方や落下点の移動、ボールのとらえ方等）
				②単元構成（ﾄﾞﾘﾙ練習 ﾀｽｸｹﾞｰﾑ 対人ﾊﾟｽﾃｽﾄ）	②ﾄﾞﾘﾙ練習・ﾀｽｸｹﾞｰﾑの様相と観察と対人ﾊﾟｽﾃｽﾄの記録分析	②課題に応じて仲間とパスを回したり、相手ｺｰﾄにサービスを入れたりしているか（パスやサービスの成功、パスの記録向上）
○学習終了後の反省・感想				①個人ノート	①４段階における活動の自己評価と感想内容の分析	①「意識」「協同」「対応」に関する自己評価の変容・感想内容が記入されているか
○段階終了後の実態調査Ⅰ				①アンケート（段階終了）	①質問事項に対する４段階の回答の分析	①活動マニュアルカードや単元構成の工夫が適切であり、仲間との意識・協同・対応した動きが習得できたか

段階	目指す生徒像			手だて	検証の方法	評価の観点
集団的技能の習得段階	協同	(1)	○仲間のプレーを観察・助言しながら、パス攻撃や３段攻撃の練習・ゲームに取り組むことができる	①活動マニュアルカード（学びシート）	①学びシートの課題内容やアドバイス、メモ内容の分析	①仲間からのアドバイスや技能確認表、習得シートを参考にした課題内容や仲間の技能に関する改善点が記入されているか
					①パス攻撃の練習における様相観察と個人ノートの分析	①技能確認表や習得シートを参考に、技能のチェックやアドバイスをしながら練習をしているか
				②単元構成（トリオ学習）	②パス攻撃の練習における様相観察と個人ノートの分析	②技能に関するアドバイスをしながら、役割（レシーブ・トス・スパイク）に応じた動きの練習をしているか
					②ﾄﾞﾘﾙ・ﾀｽｸゲームにおける様相観察と個人ノートの分析	②パスをつないだり、相手コートに返球するために技能に関するアドバイスをしながら、ドリル・タスクｹﾞｰﾑをしているか
	意識	(2)	○ﾊﾟｽ攻撃や３段攻撃の行い方を理解するとともに、互いの課題を把握し、集団的技能の習得に向けて、練習を決定・工夫し理解することができる	①活動マニュアルカード（学びシート）	①学びシートの練習方法やメモ内容の分析	①仲間と決定した練習方法や工夫点を記入しているか（ボールや回数、距離等を課題に応じて変化させる）
				②単元構成（トリオ学習）	②練習方法を決定するための話し合いにおける様相観察と個人ノートの分析	②自分の課題を仲間に伝え、仲間と課題に応じた練習方法の決定と工夫点について相談しているか（ボールや回数、距離等を課題に応じて変化させる）
	対応	(3)	○集団的技能を習得し、レシーブ、トス、アタック等を使って、仲間とのパスゲームができる	①単元構成（トリオ学習）	①パス攻撃の練習における様相観察と個人ノートの分析	①習得した個人的技能で、パス攻撃につながるレシーブ・トス・アタックが見られるか
				②単元構成（ﾄﾞﾘﾙ練習 ﾀｽｸｹﾞｰﾑ 三角ﾊﾟｽﾃｽﾄ）	②ﾄﾞﾘﾙ練習・ﾀｽｸｹﾞｰﾑの様相観察と三角ﾊﾟｽﾃｽﾄの記録分析	②課題と役割に応じて、仲間とパスをつないだり、相手ｺｰﾄに返球したりしているか（レシーブ・トス・アタックの流れ）
○学習終了後の反省・感想				①個人ノート	①４段階における活動の自己評価と感想内容の分析	①「意識」「協同」「対応」に関する自己評価の変容・感想内容が記入されているか
○段階終了後の実態調査Ⅱ				①アンケート（段階終了）	①質問事項に対する４段階の回答の分析	①活動マニュアルカードや単元構成の工夫が適切であり、仲間との意識・協同・対応した動きが習得できたか

段階	目指す生徒像			手だて	検証の方法	評価の観点
技能の活用段階	協同	(1)	○チームの目標に応じた動きを確認し合い仲間と練習・ゲームに取り組むことができる	①活動マニュアルカード（学びシート）	①学びシートの自己の目標とメモ内容の分析	①仲間からのアドバイスやチームの目標に応じた技能に関する自分の目標が記入されているか（ポジションや役割に応じた技能や仲間との連携に関する内容）
					①チーム練習における様相観察の分析	①学びシートを参考に、ポジションや役割、ルールを確認しながら練習をしているか
				②単元構成（チーム学習）	②チーム練習における様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	②ﾁｰﾑの目標やﾎﾟｼﾞｼｮﾝに関する技能のｱﾄﾞﾊﾞｲｽを仲間に伝えたり、応じながら練習をしているか
					②フルゲーム（リーグ戦）における様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	②パスをつないだり、相手コートに返球するための技能に関する指示やアドバイスをしながら、フルゲームをしているか
	意識	(2)	○チーム会議で仲間とチームの目標や練習方法を決定・改善し、理解することができる	①活動マニュアルカード（学びシート）	①学びシートの練習方法やメモ内容の分析	①仲間と決定したチームの目標や練習方法（改善点）を記入しているか（ポジションや練習の仕方等、目標に応じて変化させる）
				②単元構成（チーム学習）	②目標や練習方法を決定するための話し合いにおける様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	②チームの目標や練習方法について、自分の考えを仲間に伝えながら、決定しているか
	対応	(3)	○習得した技能を活かし、チームの目標や仲間の動きに応じたゲームができる	①単元構成（チーム学習）	①チーム練習における様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	①ポジションや役割に応じて、仲間とパスをつないだり、連携したプレーで相手コートに返球しているか（レシーブ、トス、アタックの流れ）
				②単元構成（フルゲーム）	②フルゲーム（リーグ戦）における様相観察と個人ﾉｰﾄの分析	②目標に応じて、仲間とパスをつなぎ、連携したプレーで相手コートに返球しているか（返球時のチームでの接触数、サービスの成功数）
○学習終了後の反省・感想				①個人ノート	①４段階における活動の自己評価と感想内容の分析	①「意識」「協同」「対応」に関する自己評価の変容・感想内容が記入されているか
○段階終了後の実態調査Ⅲ				①アンケート（段階終了）	①質問事項に対する４段階の回答の分析	①活動マニュアルカードや単元構成の工夫が適切であり、仲間との意識・協同・対応した動きが習得できたか
○学習後の実態調査				①事後スキルテスト	①直上パス レシーブ サービス	①一人での連続パスの回数のやレシーブ・サービスの成功本数の伸びが見られるか
				②事後アンケート	②質問事項に対する４段階の回答の分析	②これまでの学習で、バレーボールに対する興味・関心を高めることができたか

Ⅵ　研究の実際と考察

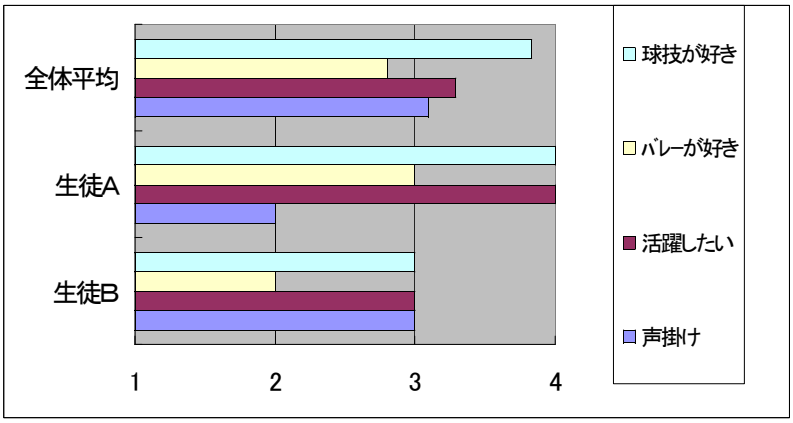
実践例　平成２０年９月３０日（火）～１１月１８日（火）
　　那珂川町立那珂川北中学校　第１学年１・２組男子　３７名　体育館にて
　　単元　「球技（バレーボール）」

１　導入の段階（第１・２時）

生徒は、小学校でソフトバレーボールを経験したことはあるが、正規のバレーボールでゲームを行った経験はなく知識もなかった。そこで、オリエンテーションにより、バレーボールの歴史・特性・技能・ルールに関する知識の習得や学習の目的・内容・方法の確認**【写真１】**を行った。また、事前のアンケートとスキルテストを実施し、その結果**【資料11-①②】**をもとに、グルーピングを行った。そして、試しのゲームによって現時点での個人とチームの技能を確認するとともに、生徒に課題意識をもたせた。

本研究における抽出生を事前アンケートやスキルテスト、試しのゲームの結果から次のような生徒に設定した。

【写真１：オリエンテーションの様子】

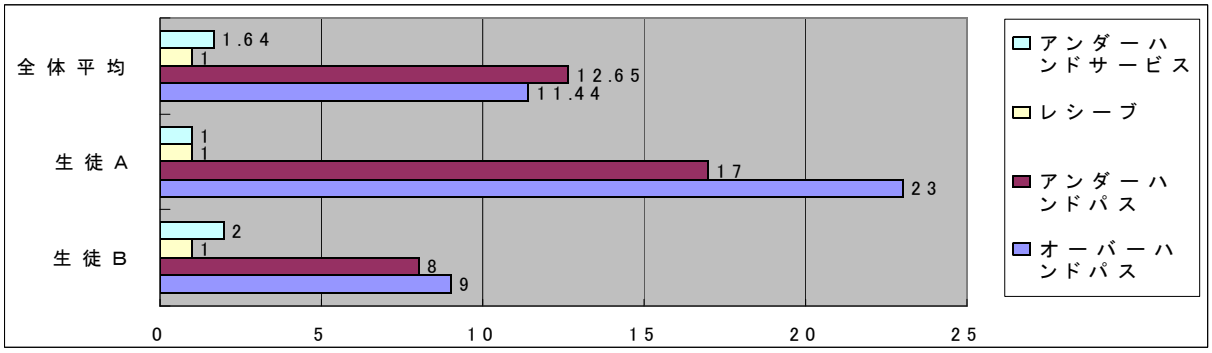


【資料11-①：事前アンケートの結果】

【アンケート項目（抜粋）】

①体育の授業では、球技の学習が好きです
②バレーボールが好きです
③ゲーム（試合）で活躍したいと思います
④声を掛け合いながら、練習やゲームに取り組みます

は　い	： 4
だいたい	： 3
あまり	： 2
いいえ	： 1



【スキルテストの項目】
○サービステスト：アンダーハンドサービスで、３本打って相手コートに何本入るかを測定
○レシーブテスト：３本のサービスをセッターに何本パスができるかを測定
○直上パステスト：１分間で何回連続の直上パスができるかを測定（オーバー、アンダー）

生徒Ａ　：　関心・意欲は高く、技能も概ね満足できる。
生徒Ｂ　：　関心・意欲は高くなく、技能も努力を要する。

【資料11-②：事前スキルテストの結果と抽出生】

以後、抽出生（生徒Ａ・Ｂ）の【協同した動き】【意識した動き】【対応した動き】について、授業の展開とともに考察していく。

２　個人的技能の習得段階（第３・４・５時）

（１）目指す生徒像

○互いにアドバイスを掛け合いながら、目的をもった練習・ゲームに取り組むことができる。（協同した動き）
○技能の名称や行い方を理解するとともに、互いの課題を把握し、個人的技能の習得に向けて、練習方法を決定し、理解することができる。（意識した動き）
○個人的技能を習得し、パスやサービスを使って、仲間とのパスゲームができる。（対応した動き）

以上のような具体的な生徒の姿を通して、「技能に応じた仲間との動き」の習得を目指す。

（２）手だて

○活動マニュアルカード
・パスやサービスの技能習得を目指した仲間との教え合いによる課題解決学習を支える知識の習得や思考・判断を支援する「学び・習得シート」の活用

○単元構成の工夫
・個人的技能の習得段階（ドリル練習・タスクゲームを含む）の設定
・ペアでの教え合いによる課題解決学習（アドバイスタイムを含む）の設定

（３）授業展開

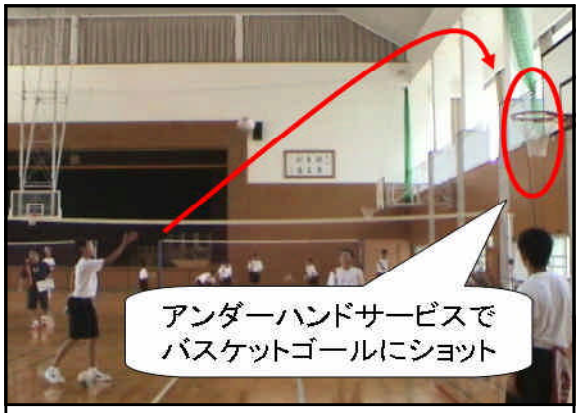
①３時間目（一斉学習）　**※抽出生（生徒Ａ・Ｂ）はそれぞれ別のペアである。**

ア《確認練習・ドリル練習》

３時間目では、パスやサービスの基本動作を理解するために、学びシートの技能確認（知識）表を活用した教師主導による一斉学習を行った。生徒は、初めて経験する動きであるため、様々な道具を使って、「ボールのとらえ方」を中心としたオーバーハンドパス、アンダーハンドパスの学習を行った**【写真２】**。さらに「ボールのとらえ方や落下点への移動」の感覚をつかませるために、ドリル練習を仕組み「的当てパス」と「的当てサービス」を行った。生徒は、指定された的にめがけてパスやサービスを繰り返し行うことができた**【写真３-①②】**。

【写真２：板を使った動きの練習の様子】

【写真３-①：的当てパスの様子】



【写真３-②：的当てサービスの様子】

②４・５時間目（ペア学習）

生徒の学習活動の流れと反応

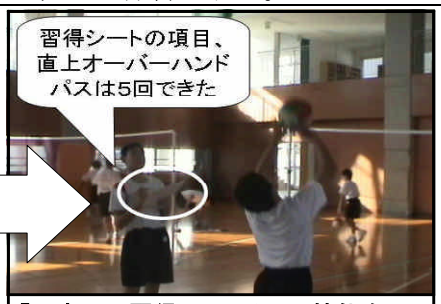
ア　《教え合い練習》※５時間目で述べる

ａ　技能の確認、課題・練習方法の決定とペア練習

この時間から、ペアでの教え合いによる課題解決学習を仕組んだ。

①ペアで習得シートの項目を確認する**【写真４】**。
②確認した項目を基に、技能確認表（学びシート）から自分の課題を選択し、学びシートに自分とペアの課題を記入する。
③ペアと話し合い、練習方法を学びシートや補助資料から選択し、学びシートに練習方法を記入する。
④アドバイスを掛け合いながら、ペア練習をする。

《手だて》
○活動マニュアルカード（習得シート）



【写真４：習得シートでペアの技能を確認する生徒Ａの様子】

生徒Ａ

５時間目の課題をアンダーハンドパスに重点を置き「へそでキャッチできるような位置へ移動」とした。

練習方法については、補助資料から「対人アンダーハンドパス（６ｍ）」を選択し、自ら練習方法を決定する姿が見られた**【写真５】**。

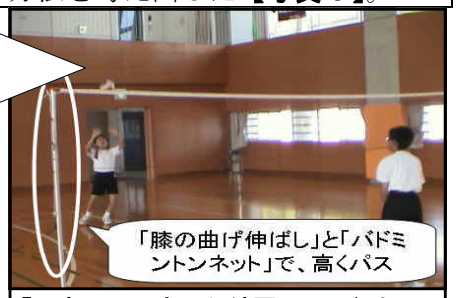
生徒Ｂ

５時間目の課題を「膝の曲げ伸ばし」とし、習得シートの項目の「オーバー・アンダーハンドパスでバスケットリングに当てる」を目指していた。

練習方法については、ペアとの話し合いにより、学びシートに例示された「対人パス」を選択した。また、前時にペアから受けた「高くパスすること」というアドバイスを参考にし、バドミントンネット越しに練習する方法を考え出した**【写真６】**。

【写真５：練習方法を決定する生徒Ａの様子】

《手だて》
○単元構成（ペア学習）
○活動マニュアルカード（学びシート）



【写真６：工夫した練習に取り組む生徒Ｂの様子】

ｂ　アドバイスタイム

ペア学習の後半に練習の成果を評価する時間を仕組んだ。

①学びシートでペアの課題を再度確認する。
②直上パスの様子を技能確認表で確認し、練習の成果を互いに評価する。
③パス技能に関するアドバイスを掛け合い、自分の課題を意識させて、タスクゲームに臨む。

生徒の学習活動の流れと反応

【写真７：学びシートで評価し合う生徒Ｂの様子】

《手だて》
○活動マニュアルカード
（学びシート）
○単元構成
（ペア学習）

生徒Ａ	生徒Ｂ
「パスをもう少し高くしたほうがいい」とアドバイスをし、ペアからは特にアドバイスがもらえていなかった**【資料12-①】**。	「ボールをしっかり飛ばす」という抽象的なアドバイスしかできなかった。ペアからは「へそでキャッチする位置に動く」というアドバイスをもらっていた**【写真７】**【資料12-②】。

イ　《タスクゲームⅠ・Ⅱ》

相手のサービスをパスでペアにつなぐ技能の習得と「ゲーム感覚」を養うために、段階的に課題の難易度を高めていくタスクゲームを仕組んだ。

（４時間目）タスクゲームⅠ
①「対人パスゲームＡ」
・学習したオーバー・アンダーハンドパスを使って、相手からのサービスをレシーブし、前衛のペアにパスする
（５時間目）タスクゲームⅡ
①「対人パスゲームＢ」
・相手からのサービスをレシーブし、前衛のペアにパス、さらに前衛がパスした位置に移動し、パスを受ける。
②「２対２ゲーム」
・必ずペアでパスを回してから相手コートに返球する。

生徒Ａ	生徒Ｂ
対人パスゲームＢのペアとの動きを理解しており、パスをつなぐための動きとして「自分がレシーブの時は、すぐに前衛へ移動してほしい」というアドバイスしていた**【写真８】**。その結果、パスがつながる場面も多くなった。 ２対２ゲームでは、これまでのペアの練習やドリル練習、タスクゲーム（対人パスゲームＡ・Ｂ）によって習得した動きを活かし、仲間とパスをつなぎ、相手コートへ正確に返球する動きも多く見られるようになった**【写真９】**。	徐々にパス技能を習得していき、レシーブについては前衛のペアへ正確なパスを送る姿がみられるようになった。 対人パスゲームＢでは、レシーブ後、前衛に移動してパスを受けなければならないため、ペアと連係した動きが必要となる。 動きが理解できていなかった生徒Ｂは、レシーブ後の動きとして「パスした後に僕の後ろから着いてきたらだめ」等のアドバイスによって動きを理解し、パスつなぎを成功させることができるようになった**【写真10】**。

生徒の学習活動の流れと反応

【写真８：対人パスゲームＢで
アドバイスをしている生徒Ａの様子】

《手だて》
○単元構成
（タスクゲームⅠ）

【写真９：２対２ゲームで
返球している生徒Ａの様子】

《手だて》
○単元構成
（タスクゲームⅡ）

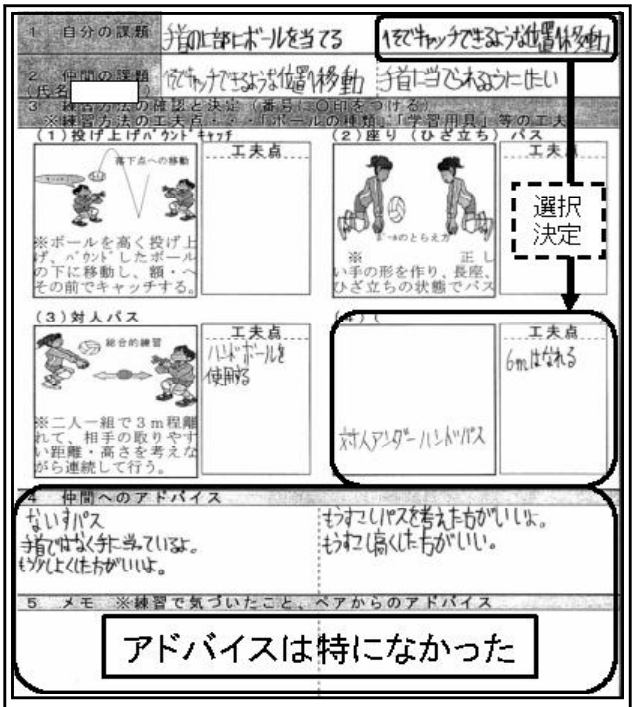
【写真10：対人パスゲームＢでの
生徒Ｂの様子】

ウ　《学びシートの整理（まとめ）》

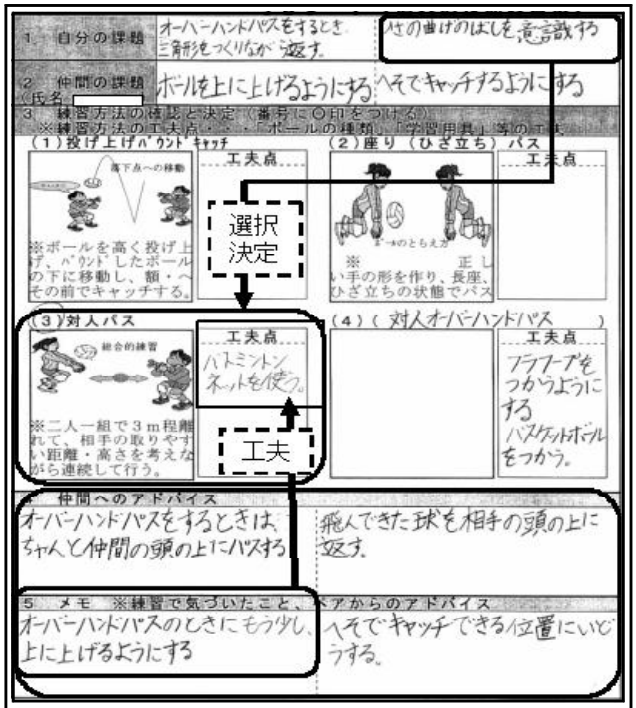
タスクゲーム後は、学びシートの整理と本時のまとめを行った。

①学びシートに「ペアへのアドバイス内容」と「練習で気づいたこと」や「ペアからのアドバイス内容」を記入する**【資料12-①②】**。
②個人ノートに本時の反省・感想を記入する**【資料13（Ｐ20）】**。

《手だて》
○活動マニュアルカード
（学びシート）



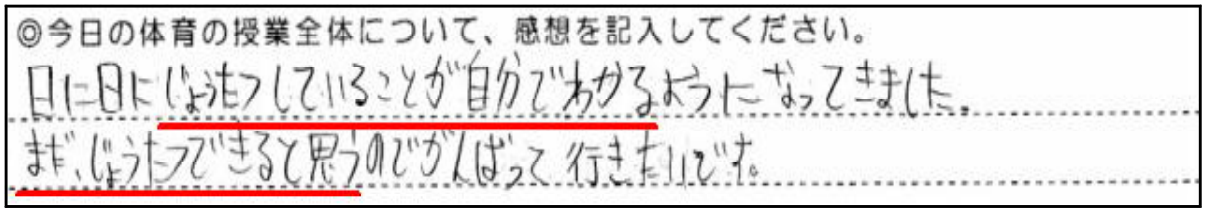
【資料12-①：生徒Ａの学びシート】



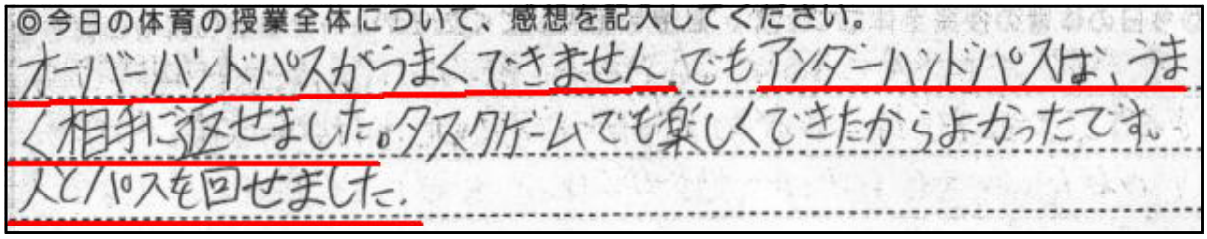
【資料12-②：生徒Ｂの学びシート】

学習後の感想には、技能の高まりを自ら感じている内容が記入されており、目的をもった練習やゲームに取り組んでいたことがうかがえるものであった**【資料13】**。

生徒Ａ


◎今日の体育の授業全体について、感想を記入してください。
日に日にじょうたつしていることが自分でわかるようになってきました。
まだ、じょうたつできると思うのでがんばって行きたいです。

生徒Ｂ


◎今日の体育の授業全体について、感想を記入してください。
オーバーハンドパスがうまくできません。でもアンダーハンドパスは、うまく相手に返せました。タスクゲームでも楽しくできたからよかったです。
人とパスを回せました。

【資料13：個人的技能の習得段階における学習の感想内容】

段階終了後アンケート（「はい・だいたい・あまり・いいえ」で回答）では、抽出生（生徒Ａ・Ｂ）はすべての項目において、「はい」という回答であった。具体的な項目と回答した理由は次のとおりである**【資料14】**。

項目１：ペアでの教え合いによる学習は、学習する上で役に立つ
生徒Ａ「自分でできていないところが分かる」から
生徒Ｂ「自分のできないところやペアのできないところを教え合ったりできる」から

項目２：活動マニュアルカード（学び・習得シート）は、学習する上で役に立つ
生徒Ａ「レシーブなどのやり方が分かりやすかった」し、「自分の課題を書いているので、忘れても思い出せる」から
生徒Ｂ「自分と仲間の課題を書いているので教え合える」し、「自分の課題を見つけることができる」また、「パスの仕方が載ってある」から

項目３：ドリル練習やタスクゲームは、学習する上で役に立つ
生徒Ａ「以前よりうまくなったことが分かる」から
生徒Ｂ「的当てパスや対人パスゲームは、とても上手くなれるための練習と思った」から

【資料14：段階終了後アンケートの回答理由（生徒Ａ・Ｂ）】

（４）考察

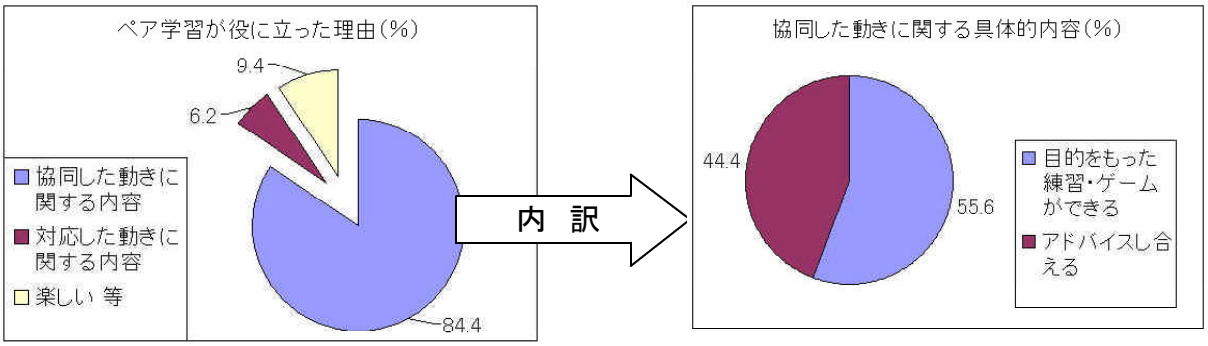
①【協同した動き】の習得について

ペアでの教え合いによる課題解決学習を仕組んだことで、アドバイスや相互評価活動が活性化し、仲間と協力して練習・ゲームに取り組むことができたと考える。

その根拠は、**【写真６・７・８（Ｐ17～19）】**のように、生徒Ａがペアにアドバイスをしたり、生徒Ｂがアドバイスを受け自己の課題や能力に応じた練習やゲームに取り組むことができたことにある。

また、段階終了後のアンケート**【資料14：項目１】**では、生徒全体の９１．９％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料15-①】**のように【協同した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由をあげていた生徒からは「コミュニケーションを深め、連携プレーができる」という理由をあげており、【対応した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料15-①：段階終了後アンケートの回答理由と内容】

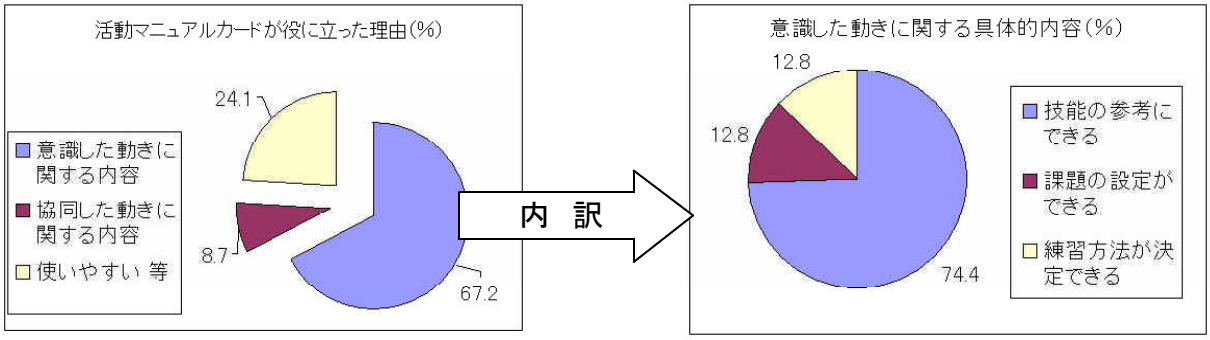
②【意識した動き】の習得について

活動マニュアルカードを活用したことで、ペアでの技能の確認（習得シート：パス)、課題の設定や互いの課題把握（学びシート)、課題に応じた練習方法の選択・決定（学びシート）をすることができたと考える。さらに、技能確認表（学びシート）で、パスの名称や行い方を理解することで、アドバイスのための知識を習得させることができたと考える。

その根拠は、**【写真４・５・６（Ｐ17)】や【資料12-①②（Ｐ19)】**のように、生徒Ａは、活動マニュアルカード（習得シート、学びシート）を活用し、技能の確認、課題や練習方法を選択・決定しており、生徒Ｂは、前時のアドバイスの記録を基にした課題・練習方法を決定することができていたことにある。

また、段階終了後のアンケート**【資料14：項目２】**では、生徒全体の９７．３％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料15-②】**のように【意識した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由をあげていた生徒からは「活動の記録ができるので次時にアドバイスできる」という理由をあげており、【協同した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料15-②：段階終了後アンケートの回答理由と内容】

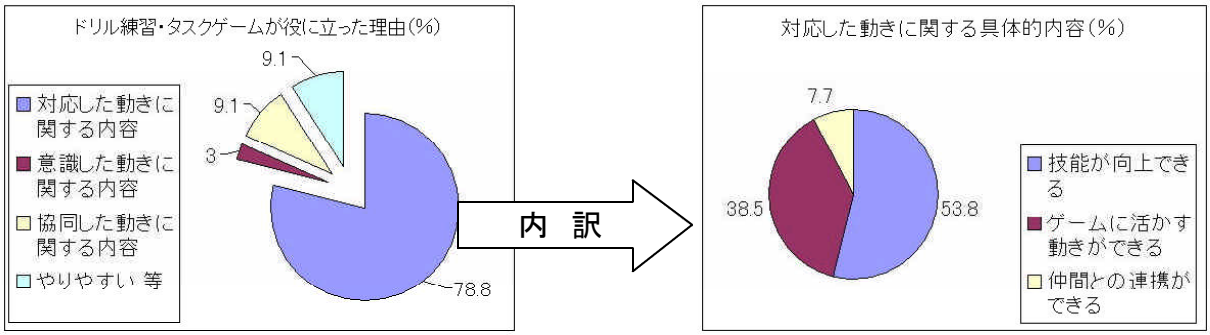
③【対応した動き】の習得について

【協同した動き】と【意識した動き】の高まりにより、ドリル練習やタスクゲームが有効に働き、仲間とくり返しパスを回す技能や「ゲーム感覚」を習得することができたと考える。

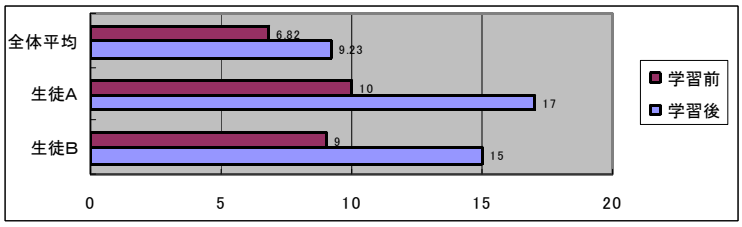
その根拠は、仲間とのパス回しによって**【写真９・10（Ｐ19)】**のように、ジャンプしてアタックをしたり、「ゲーム感覚」が養われ、仲間との連携による動きによってパス回しを成功させる姿が見られたことにある。さらに、**【資料16（Ｐ22)】**のように、全体平均や生徒Ａ・Ｂの段階前後における対人パステストにおける記録の向上や**【資料13】**の技能の上達を自ら実感できた記述から仲間とパスを回す技能の高まりがうかがえる。

また、段階終了後のアンケート**【資料14：項目３】**では、生徒全体の９１．９％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料15-③（Ｐ22)】**のように【対応した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由をあげていた生徒からは「アドバイスがしやすい」「活動の工夫ができる」という理由をあげており、【協同した動き】【意識した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料15-③：段階終了後アンケートの回答理由と内容】



【資料16：対人パステストの学習前と学習後の比較】

「対人パステスト」

○ネットを挟んで向き合い、オーバー・アンダーハンドパスを使い分けながら、パスの連続回数を測定する（１分間）

※抽出生（生徒Ａ・Ｂ）は、それぞれのペアと測定を行っている

以上のことから、個人的技能の習得段階において、活動マニュアルカードを活用したペアによる課題解決学習を仕組んだことは、目指す生徒像に迫る上で有効であったと考える。

３　集団的技能の習得段階（第６・７・８時）

（１）目指す生徒像

○仲間のプレーを観察・助言しながら、パス攻撃や３段攻撃の練習・ゲームに取り組むことができる。（協同した動き）
○パス攻撃や３段攻撃の行い方を理解するとともに、互いの課題を把握し、集団的技能の習得に向けて、練習を決定・工夫し、理解することができる。（意識した動き）
○集団的技能を習得し、レシーブ・トス・アタック等を使って、仲間とのパスゲームができる。（対応した動き）

以上のような具体的な生徒の姿を通して、「役割に応じた仲間との動き」の習得を目指す。

（２）手だて

○活動マニュアルカード
・パス攻撃や３段攻撃の技能習得を目指した仲間との教え合いによる課題解決学習を支える知識の習得や思考・判断を支援する「学び・習得シート」の活用

○単元構成の工夫
・集団的技能の習得段階（ドリル練習・タスクゲームを含む）の設定
・トリオでの教え合いによる課題解決学習（アドバイスタイムを含む）の設定

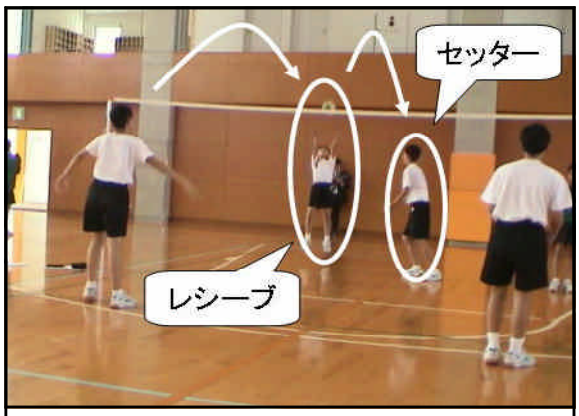
（３）授業展開

①６時間目（一斉学習）**※抽出生（生徒Ａ・Ｂ）は同じトリオである。**

ア《確認練習・ドリル練習》

６時間目では、パス攻撃や３段攻撃を使って組織的に相手コートへ返球するために、ポジショニングやレシーブ、トス、アタック（スパイク）の役割について、学びシートの技能確認（知識）表を活用した教師主導による一斉学習を行った。前時までに習得した技能を活かし、構え方やパスする仲間（方向）へ体を向ける感覚をつかませるためにドリル練習を仕組み、「三角パス」と「一列パス」を行った**【写真11-①②】**。

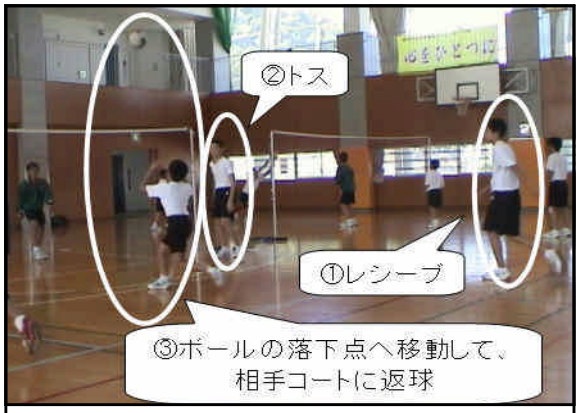
【写真11-①：三角パスの様子】



【写真11-②：一列パスの様子】

イ《タスクゲームⅢ》

ドリル練習で習得した技能を活かし、３対３のタスクゲームを行った。タスクゲームでは、仲間とパスを回す技能（役割に応じた仲間との動き）を習得するために、レシーブ・トス・アタックの流れで相手コートに返球する「返球ゲーム」を行った。ローテーションや必ず３人が一回ずつパスし合ってから返球するというルールを決めていたので、ローテーション毎のポジショニングやその役割（レシーバー、セッター、アタッカー）を意識しながら、動くことができた**【写真12】**。



【写真12：タスクゲームⅢ（返球ゲーム）の様子】

②７・８時間目（トリオ学習）

生徒の学習活動の流れと反応

ア　《教え合い学習》※８時間目で述べる

ａ　技能の確認、課題・練習方法の決定とトリオ練習

この時間からは、トリオでの教え合いによる課題解決学習を仕組んだ。

①トリオで習得シートの項目を確認する。
②確認した項目を基に、技能確認表（学びシート）から自分の課題を選択し、学びシートに自分とトリオの課題を記入する。
③トリオで話し合い、練習方法を学びシートや補助資料から選択し、学びシートに記入する。
④アドバイスを掛け合いながら、トリオ練習をする。

《手だて》
○活動マニュアルカード（習得シート）
○単元構成（トリオ学習）
○活動マニュアルカード（学びシート）

生徒Ａ	生徒Ｂ
８時間目の課題をレシーブに重点を置いた「ボールへの反応」と設定した。	８時間目の課題をトスに重点を置いた「山なりのパス」と設定した。

トリオ（生徒Ａ・Ｂ）の練習方法

【写真13：工夫した練習に取り組む生徒Ａ・Ｂの様子】

練習方法については、学びシートに例示された練習方法から「扇形パス（ボールコントロール②）」を選択した。また、ボールを正しく捉えるために、「レクリエーションボール」を使ってボールコントロールの難易度を上げつつ、各自の課題を意識した練習に取り組んだ**【写真13】**。

《手だて》
○単元構成（トリオ学習）
○活動マニュアルカード（学びシート）

生徒の学習活動の流れと反応

生徒Ａ

パス技能に関する知識をさらに深めるために、掲示物でアンダーハンドパスのかまえを確認したりする姿も見られるようになった**【写真14】**。

【写真14：掲示物で技能を確認する生徒Ａの様子】

【写真15：ｽﾃｰｼﾞを使った練習に取り組む様子】

他のトリオ

ステージからボールを投げ、強いボールをレシーブするための工夫した練習に取り組むトリオの姿も見られた**【写真15】**。

ｂ　アドバイスタイム

トリオ学習の後半に練習の成果を評価する時間を仕組んだ。

①時計回りの三角パスで自分がパスする相手の課題を学びカードで確認する。
②三角パスで、練習の成果を互いに評価する。
③パス技能に関するアドバイスを掛け合い、自分の課題を意識させて、タスクゲームに臨む。

《手だて》
○活動マニュアルカード（学びシート）
○単元構成（トリオ学習）

生徒Ａ

トリオの仲間から「パスがいろんな方向に飛んでいるから、体をパス方向に向けた方がいい」とアドバイスされていた。

生徒Ｂ

生徒Ａから「パスをもう少し山なりのパスをしたほうがいい」とアドバイスされていた。

イ　《タスクゲームⅣ》

相手からのサービスをレシーブ・トス・アタック（スパイク）のパス攻撃や３段攻撃で返球する技能の習得とゲーム感覚を養うために、タスクゲームを仕組んだ。

（７・８時間目）タスクゲームⅣ
①「３対３ゲーム」
・「必ず３回で相手コートに返球する」「サービスはチームで交互に１本ずつ行う」「ローテーションあり（前衛１名、後衛２名）」を特別ルールとしたゲームをする。

生徒Ａ

トリオ全体に「パスをつないでいこう」や「ボールを拾うときに声を出そう」という組織的に返球するためのアドバイスをしながら、積極的に３対３ゲームに取り組んでいた**【写真16】**。

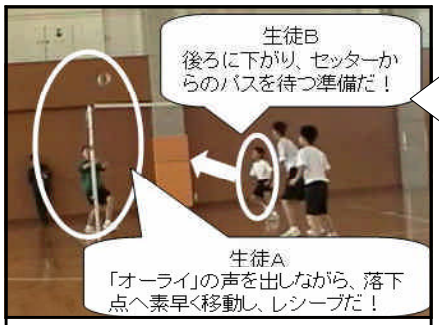
生徒Ｂ

これまでのタスクゲームの中で発言することはなかったが、「パスしたらさがろう」というトリオ全体に対するアドバイスをしながら、レシーブ・トスといった連係プレーを成功させていた**【写真16】**。

生徒の学習活動の流れと反応

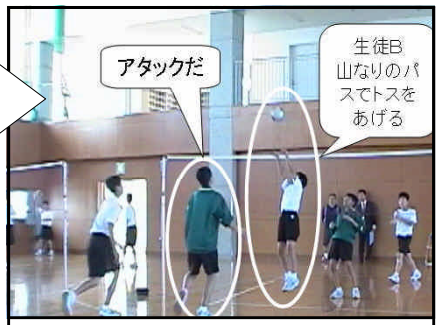
トリオ（生徒Ａ・Ｂ）のタスクゲーム

生徒Ａ・Ｂのタスクゲームでは、次のプレーに対する準備姿勢（ボールを持たないときの動き）をつくる動きが見られた**【写真16】**。また、体全体を使って「山なりのパス」を出す生徒Ｂの姿も見られた**【写真17】**。



【写真16：３対３ゲームに取り組む　生徒Ａ・Ｂの様子】

《手だて》
○単元構成
（タスクゲームⅣ）



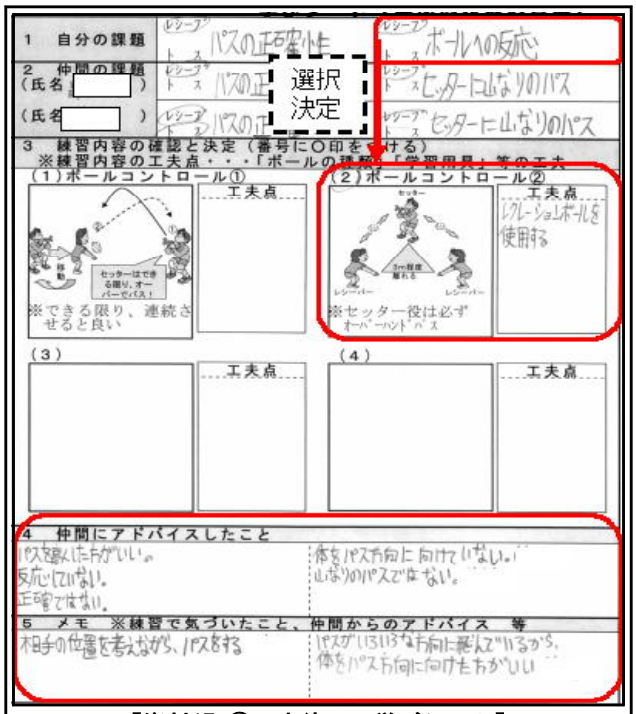
【写真17：３対３ゲームに取り組む　生徒Ｂの様子】

ウ　《学びシートの整理（まとめ）》

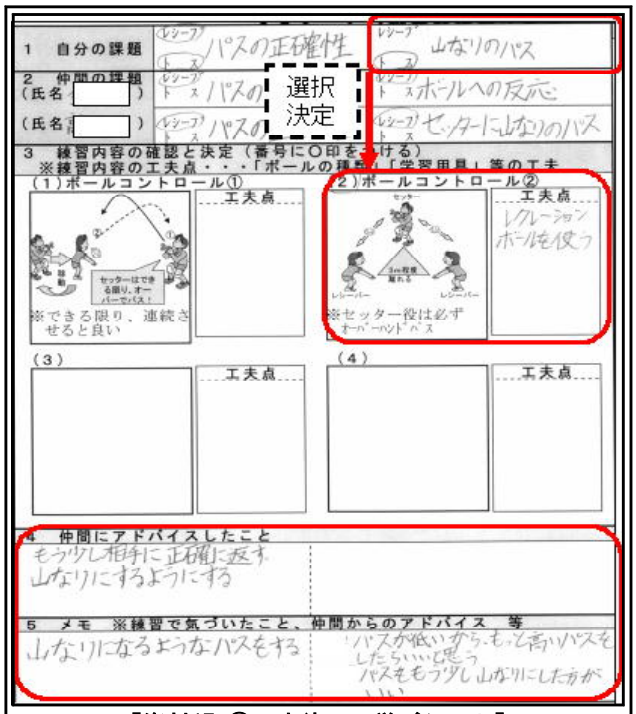
タスクゲーム後は、学びシートの整理と本時のまとめを行った。

①学びシートに「仲間へのアドバイス内容」と「練習で気づいたこと」や「仲間からのアドバイス内容」を記入する**【資料17-①②】**。
②個人ノートに本時の反省・感想を記入する**【資料18（Ｐ26）】**。

《手だて》
○活動マニュアルカード
（学びシート）



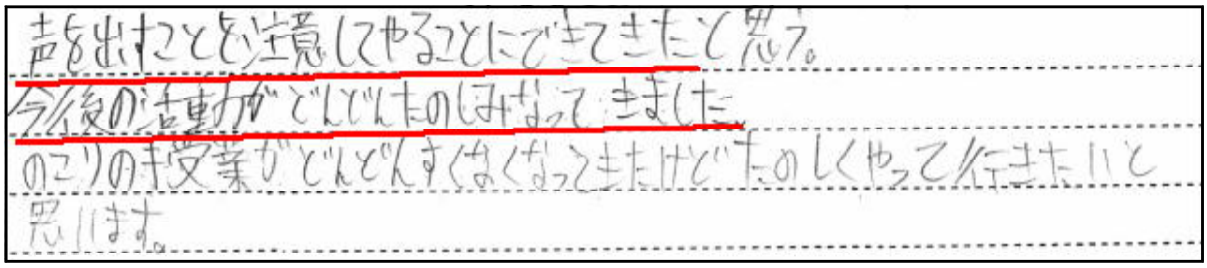
【資料17-①：生徒Ａの学びシート】



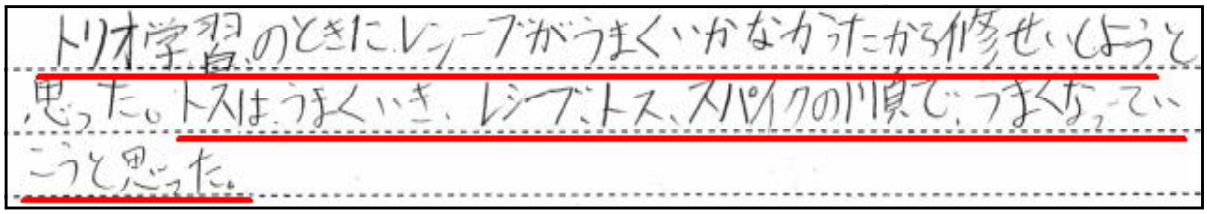
【資料17-②：生徒Ｂの学びシート】

学習後の感想には、技能の高まりや練習に対する目的意識についての内容が記入されており、今後の目標がうかがえるものが見られた**【資料18】**。

生徒Ａ


声を出すことを意識してやることにできてきたと思う。
今後の活動がどんどんたのしみになってきました。
のこりの授業がどんどんすくなくなってきたけどたのしくやって行きたいと
思います。

生徒Ｂ


トリオ学習のときにレシーブがうまくいかなかったから修せいしようと
思った。トスはうまくいき、レシーブ、トス、スパイクの順でうまくなっていこうと思った。

【資料18：集団的技能の習得段階における学習の感想内容】

段階終了後アンケート（「はい・だいたい・あまり・いいえ」で回答）で抽出生（生徒Ａ・Ｂ）は、すべての項目において、「はい」という回答であった。具体的な項目と回答した理由は次のとおりである**【資料19】**。

項目１：トリオでの教え合いによる学習は、学習する上で役に立つ
生徒Ａ「自分では分からないところを教えてくれる」から
生徒Ｂ「教え合ったら、課題がすぐに解決できる」から

項目２：活動マニュアルカード（学び・習得シート）は、学習する上で役に立つ
生徒Ａ「技能のやり方が詳しく載っている」から
「課題を忘れずに、いつでもみることができる」から
生徒Ｂ「うまくなるためには基本が大切だから、細かな動きが確認できる」から

項目３：ドリル練習やタスクゲームは、学習する上で役に立つ
生徒Ａ「ゲームで自分がどのように動いたほうがいいかが分かる」から
生徒Ｂ「基本の動きを練習してうまくなれる」から

【資料19：段階終了後アンケートの回答理由】

（４）考察

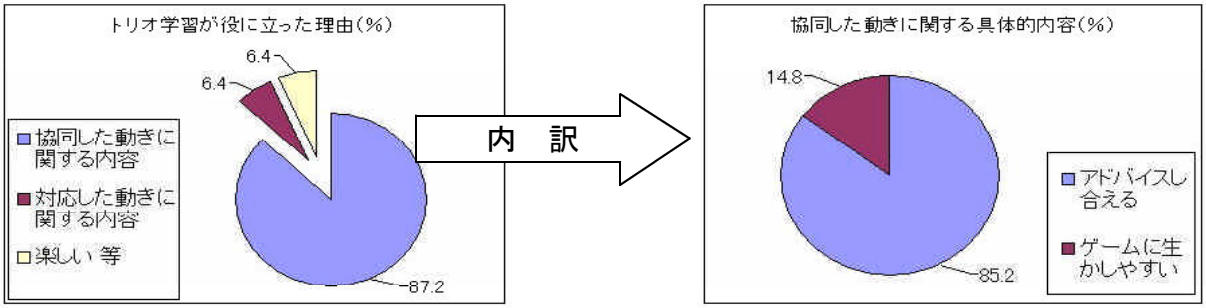
①【協同した動き】の習得について

トリオでの教え合いによる課題解決学習を仕組んだことで、仲間と連携した動きを観察し、アドバイスしながら、パス攻撃や３段攻撃の練習・ゲームに取り組むことができたと考える。

その根拠は、**【資料18】**や**【写真16（Ｐ25)】**のように、的確にアドバイスをする生徒Ａの姿やこれまであまり発言できなかった生徒Ｂがトリオの動きを観察し、具体的なアドバイスをしながら練習やゲームに取り組むことができるようになった姿にある。

また、段階終了後のアンケート**【資料19：項目１】**では、生徒全体の９７．２％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料20-①】**のように【協同した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由をあげていた生徒からは「技能が向上できる」という内容があげられており、【対応した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料20-①：段階終了後アンケートの回答理由と内容】

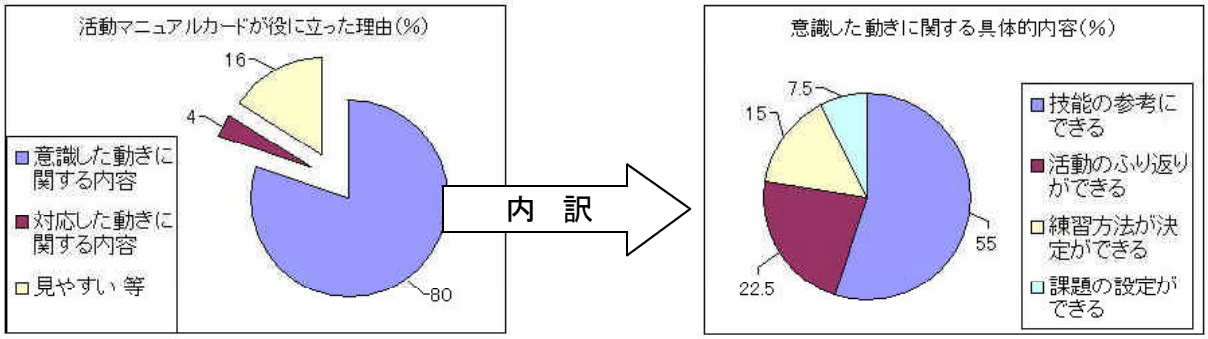
②【意識した動き】の習得について

活動マニュアルカードを活用したことで、トリオでの技能の確認（習得シート：レシーブ、トス、アタック）、課題の設定やトリオの課題把握（学びシート）、課題に応じた練習方法の選択・決定・工夫（学びシート）をすることができたと考える。

その根拠は、**【資料17-①②（Ｐ25)】**のように、生徒Ａはレシーブに、生徒Ｂはトスに課題の重点を置き、自分なりの考えで課題を設定し、練習方法を選択（学びシート）することができたことにある。また、前時の学習を活かし、パスの正確性を高めるために、**【写真13（Ｐ23)】**のような工夫した練習に取り組む姿も見られたことにもある。さらに、**【写真14（Ｐ24)】**のように掲示物でレシーブ・トス・アタック（スパイク）に関する技能の知識を得ながら、パス攻撃・３段攻撃の行い方を理解する姿や**【写真15（Ｐ24)】**のように、ステージを使った「場を工夫」した練習を設定したトリオの姿も見られたことにもある。

また、段階終了後のアンケート**【資料19：項目２】**では、生徒全体の９４．４％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料20-②】**のように【意識した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由をあげていた生徒からは「技能が向上できる」という内容があげられており、【対応した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料20-②：段階終了後アンケートの回答理由と内容】

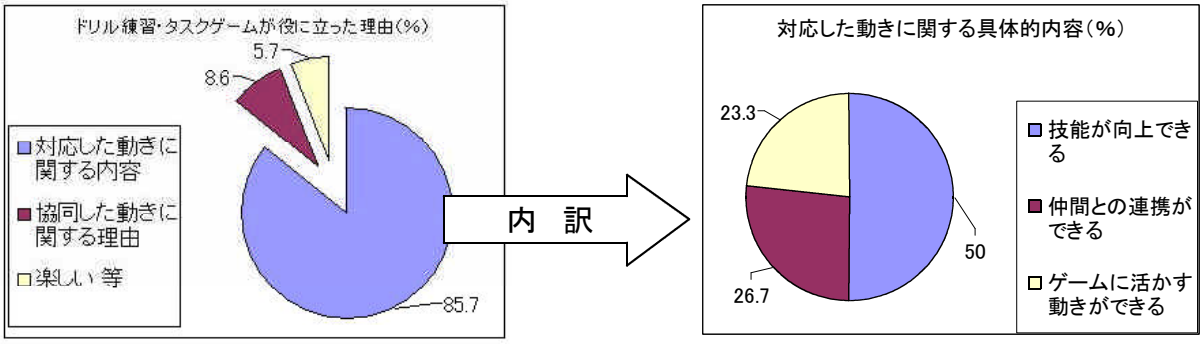
③【対応した動き】の習得について

前段階で高まった【対応した動き】によって、生徒は【意識した動き】【協同した動き】をさらに高め、３対３のドリル練習やタスクゲームが有効に働き、仲間との連係プレーによって相手コートに返球することができた。また、「ゲーム感覚」を養うこともでき、パス攻撃や３段攻撃を習得することができたと考える。

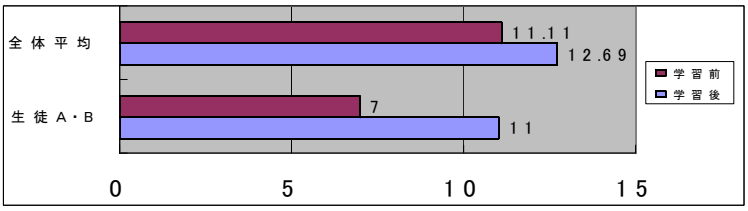
その根拠は、タスクゲームⅣ**【写真16・17（Ｐ25)】**のように、レシーブ・トス・アタック（スパイク）がつながるようになった姿にある。また、**【資料21（Ｐ28)】**の段階前後における三角パステストの記録を比較すると全体平均には達することができなかったが、トリオとしての高まりは大きく、概ね満足できる結果であったことにある。さらに、**【資料19：項目２】**のように、「ボール操作」や「ボールを持たないときの動き」の習得がうかがえる記述内容も見られたことにある。

また、段階終了後のアンケート**【資料19：項目３】**では、生徒全体の１００％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料20-③（Ｐ28)】**のように【対応した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由をあげていた生徒からは「練習が活かせる、課題に取り組める」という内容があげられており、【協同した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料20-③：段階終了後アンケートの回答理由と内容】



【資料21：三角パステストの学習前と学習後の比較】

「三角パステスト」

○三人で３ｍ程度離れた三角形を作り、時計回りでパスの連続回数を測定する（１分間）
※抽出生（生徒Ａ・Ｂ）は、同じトリオで測定を行っている。

以上のことから、集団的技能の習得段階において、活動マニュアルカードを活用したトリオによる課題解決学習を仕組んだことは、目指す生徒像に迫る上で有効であったと考える。

４　技能の活用段階（第９・１０・１１時）

（１）目指す生徒像

○チームの目標に応じた動きを確認し合い、仲間と練習・ゲームに取り組むことができる。
（協同した動き）
○チーム会議で仲間とチームの目標や練習方法を決定・改善し、理解することができる。
（意識した動き）
○習得した技能を活かし、チームの目標や仲間の動きに応じたゲームができる。
（対応した動き）

以上のような具体的な生徒の姿を通して、「目標に応じた仲間との動き」の習得を目指す。

（２）手だて

①活動マニュアルカード
・習得した技能をゲームで活かすための知識の習得や思考・判断を支援する「学び・習得シート」の活用
②単元構成の工夫
・技能の活用段階（リーグ戦、ルールの工夫）の設定
・チームでの動きを確認する学習（チーム会議、チーム練習）の設定

（３）授業展開

①９・１０・１１時間目（チーム学習）**※抽出生（生徒Ａ・Ｂ）は同じチームである。**

生徒の学習活動の流れと反応

ア　《教え合い学習》※１１時間目で述べる

ａ　技能の確認、チームの目標・練習方法の決定、自己の目標とチーム練習

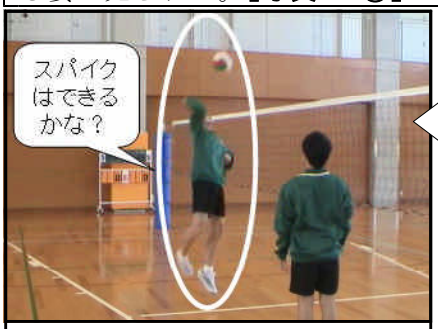
この時間からは、チームで動きを確認し、習得した技能を活かす学習を仕組んだ。

①ペアで習得シートの項目について確認・練習をする**【写真18-①②】**。
②チームで話し合い、目標・練習方法を補助資料から選択し、学びシートに記入する。
③チームの目標に応じた自己の目標を学びシートに記入する。**【写真19】**
④アドバイスを掛け合いながら、チーム練習をする**【写真20-①②】**。

生徒の学習活動の流れと反応

生徒Ａ

習得シートの項目にあるパスだけでなく、スパイクに挑戦し、くり返し練習をする姿が見られた。**【写真18-①】**



【写真18-①：スパイクの確認をする生徒Ａの様子】

生徒Ｂ

習得シートの項目にあるパスだけでなく、サービスに挑戦し、くり返し練習をする姿が見られた。**【写真18-②】**

【写真18-②：サービスの確認をする生徒Ｂの様子】

《手だて》
○活動マニュアルカード（習得シート）

チームの目標と練習方法（チーム会議、チーム練習）

生徒Ａをチームリーダーとした話し合いによって、チームの目標を「得点したら全員で喜ぶ（態度面）」「相手コートの奥に返球する（技能面）」に決定した**【写真19】**。また、ポジションを決定し、練習方法については「パス攻撃の練習」を選択し、相手コートの奥に返球することを目的に練習に取り組んだ。

【写真19：チームの会議で目標や練習方法を話し合う様子】

《手だて》
○単元構成（チーム学習）
○活動マニュアルカード（学びシート）

生徒Ａ

チームの目標を基に、自己の目標を「パスする方向に体を向ける」と設定した。練習では、パスをつなぐ仲間の名前を呼びながらプレーする姿が見られたが、自己の目標については不十分な面が見られた**【写真20-②】**。

生徒Ｂ

チームの目標を基に、自己の目標を「ボールの落下点へ素早く反応する」と設定した。練習では、落下点へ移動し、仲間へ正確にパスする姿が見られた**【写真20-①】**。

【写真20-①：生徒Ａに正確なパスを送る生徒Ｂの様子】

【写真20-②：オーバーハンドパスで返球している生徒Ａの様子】

《手だて》
○単元構成（チーム学習）

生徒の学習活動の流れと反応

イ　《リーグ戦》

【資料10（Ｐ11）】に示す特別ルールで、６対６ゲームを仕組んだ。

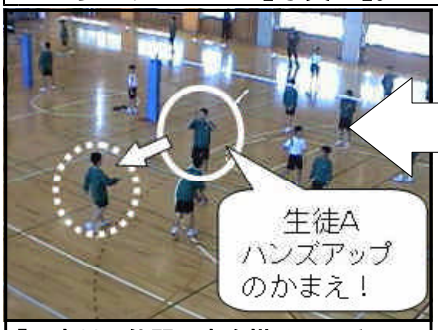
①６班との６対６ゲームをする。（リーグ戦）
②アドバイスタイムで動きの確認をする。
③４班との６対６ゲームをする。（リーグ戦）
④チーム会議で動きの確認をする。
⑤３班対４班のゲームの審判をする。

生徒Ａ

「かまえ」「励まし」等、仲間へ声を掛け、ゲームに取り組んでいた**【写真21】**。また、チーム会議でもレシーブ時のポジションの確認等、チームリーダーとしての動きが多く見られた**【写真22】**。

生徒Ｂ

習得したパス技能を活用して、相手からのサービスを正確にレシーブし、仲間にパスする動きが多く見られた**【写真23】**。また、仲間のサービスに対して「線をふまないように」というアドバイスやチームのナイスプレーを喜ぶ姿も見られた。



【写真21：仲間に声を掛けている生徒Ａの様子】

《手だて》
○単元構成
（チーム学習）

【写真22：生徒Ａが中心となったチーム会議の様子】

《手だて》
○単元構成
（チーム学習）
○活動マニュアルカード
（学びシート）

【写真23：仲間に正確なパスを送る生徒Ｂの様子】

チームの動き（リーグ戦）

チーム会議によってチームの一人一人がポジションの役割を確認し、チームの目標「相手コートの奥に返球する」が達成されたプレーも多く見られるようになった**【写真24】**。

【写真24：相手コート奥をねらったパス攻撃の様子】

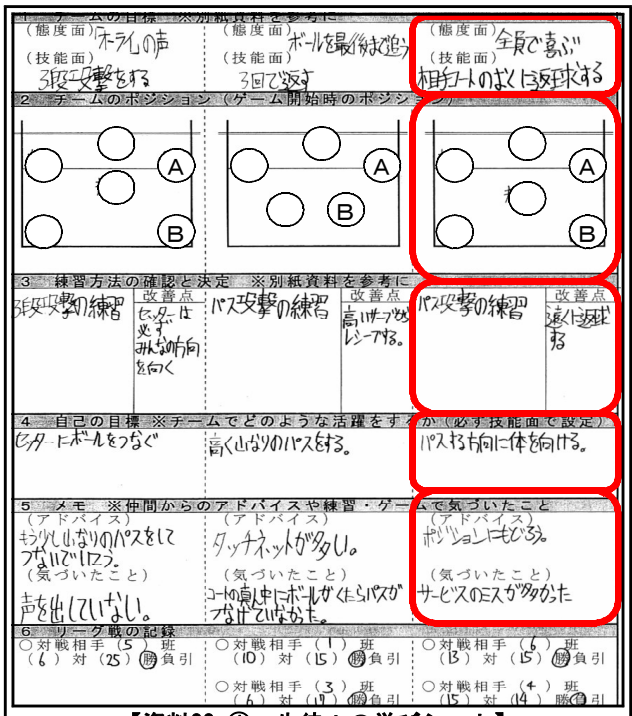
生徒の学習活動の流れと反応

ウ　《学びシートの整理（まとめ）》

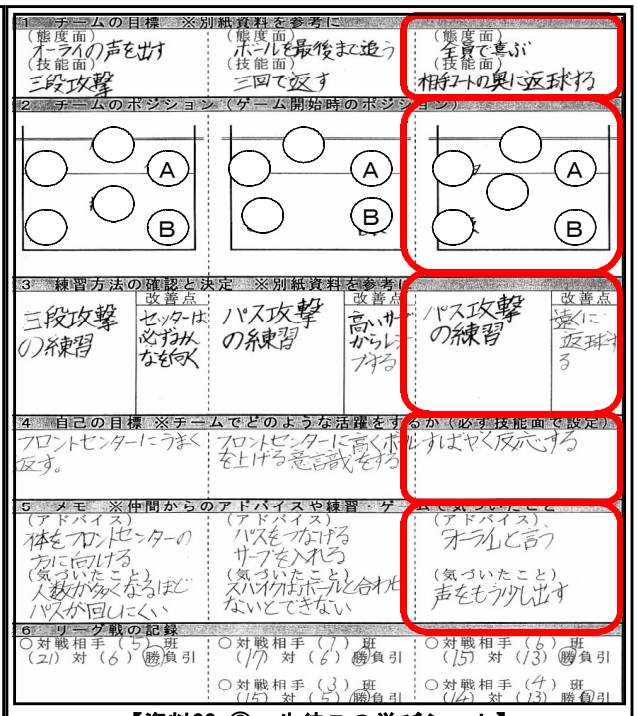
リーグ戦後は、学びシートの整理と本時のまとめを行った。

①学びシートに「仲間からのアドバイス」「ゲームで気づいたこと」を記入する**【資料22-①②】**。
②個人ノートに本時の反省・感想を記入する**【資料23】**。

《手だて》
○活動マニュアルカード
（学びシート）



【資料22-①：生徒Ａの学びシート】



【資料22-②：生徒Ｂの学びシート】

学習後の感想には、仲間との関わりによる技能の高まりがうかがえる内容が見られた**【資料23】**。

生徒Ａ

負けてはいました。すごくくやしいです。今までパスがつなげれ楽しいバレー学習ができたのでよかったです。最後のスキルテストでは今までやってきた練習をいかしてより良い結果を残していきたいです。

生徒Ｂ

たいです。バレーボールの試合の前、チームから高くボールを上げてと言われて試合のとき、うまくフロントセンターに返せたのと、三段攻撃ができてうれしかったです。

【資料23：技能の活用段階における学習の感想内容】

段階終了後アンケート（「はい・だいたい・あまり・いいえ」で回答）で抽出生（生徒Ａ・Ｂ）は、すべての項目において、「はい」という回答であった。具体的な項目と回答した理由は次のとおりである**【資料24】**。

項目１：チームでの教え合いによる学習は、学習する上で役に立つ
生徒Ａ：「自分では気づいていないことが分かった」から
生徒Ｂ：「間違った動きを教え合いで改善できる」から

項目２：活動マニュアルカード（学び・習得シート）は、学習する上で役に立つ
生徒Ａ：「チームでの動き方が色々分かった」から
生徒Ｂ：「バレーボールの仕方や役割が詳しく載っている」から

項目３：リーグ戦は、学習する上で役に立つ
生徒Ａ：「仲間との連携ができる」から
生徒Ｂ：「実際のバレーボールみたいで、やる気が出た」から

【資料24：段階終了後アンケートの回答理由】

（４）考察

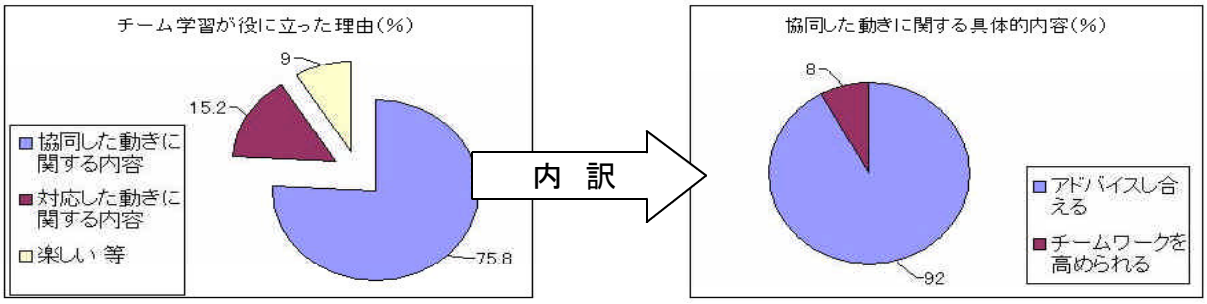
①【協同した動き】の習得について

チームでの動きを確認する学習を仕組んだことで、チームや自己の目標に応じた動きを確認しながら、パス攻撃の練習やゲームに取り組むことができたと考える。

その根拠は、**【資料24：項目１】**のように、仲間からのアドバイスによって、できていないところへの気づきや練習ができることから、仲間との学習が有効に働いたことがうかがえることにある。また、生徒Ａは**【写真21（Ｐ30)】**のように、ゲーム中に仲間へアドバイスを掛け、チームとしてパスをつなぎ、チームの目標を達成させようとしていた。さらに、チーム会議でも**【写真22（Ｐ30)】**のように、積極的に発言しながらチームの動きを確認する姿も見られた。生徒Ｂは、リーグ戦**（Ｐ３０）**の中で、連携プレーに対して手をたたきながら喜んだり、サービスを打つ仲間へアドバイスをしながらゲームに取り組む姿が見られた。

また、段階終了後のアンケート**【資料24：項目１】**では、生徒全体の９４．２％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料25-①】**のように【協同した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由をあげていた生徒からは「技能が高められる」という内容があげられており、【対応した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料25-①：段階終了後アンケートの回答理由と内容】

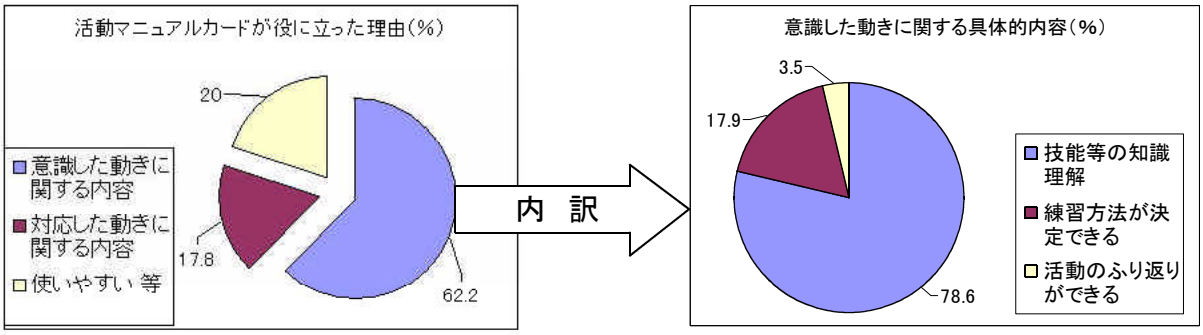
②【意識した動き】の習得について

活動マニュアルカードを活用したことで、自ら技能の確認（習得シート：スパイク、サービス等）やチームの目標とポジション、練習方法の選択・決定、自己の目標（学びシート）を自ら設定させることができたと考える。また、**【資料24：項目２】**ように、６人制バレーボールの行い方も理解できたことがうかがえる。

その根拠は、**【写真19（Ｐ29)】**や**【資料22-①②（Ｐ31)】**のように、チームの目標を「相手コートの奥に返球する」、練習方法を「パス攻撃の練習」、改善点を「遠くに返球する」に決定することができたことやチームの目標に応じた自己の目標を決定できたことにある。

また、段階終了後のアンケート**【資料24：項目２】**では、生徒全体の９７．１％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料25-②】**のように【意識した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由をあげていた生徒からは、「自己の技能が分かる」という内容があげられており、【対応した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料25-②：段階終了後アンケートの回答理由と内容】

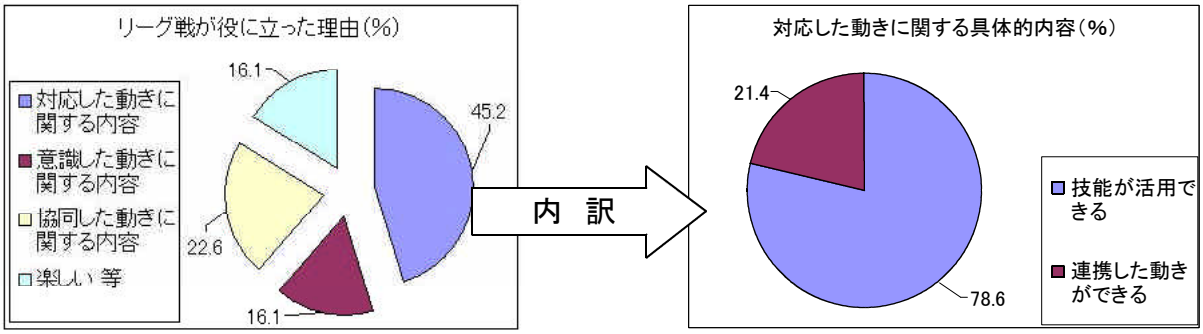
③【対応した動き】の習得について

特別ルール（Ｐ１１）を設けたリーグ戦を仕組んだことで、**【写真24（Ｐ30)】**や**【資料23（Ｐ31)】**のように仲間とパスをつなぎ、相手コートへ返球する技能を習得していくことができたと考える。

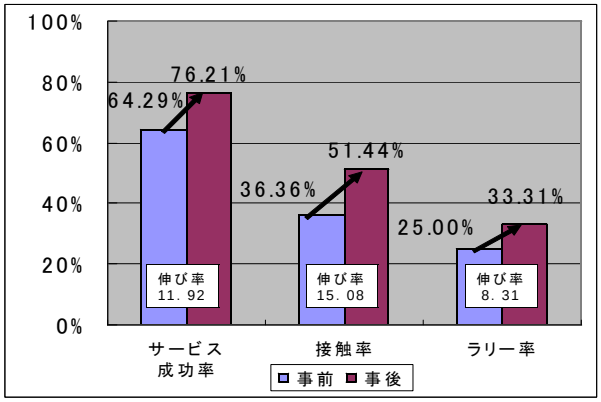
その根拠は、生徒Ａの**【写真20-②（Ｐ29)】**や**【写真24（Ｐ30)】**のような体の向きやパスの正確性などの不十分な面も見られるが、習得した技能を活かしながら、相手コートに返球したり、仲間にパスをつなぐ動きが見られたことにある。また、生徒Ｂにおいても**【写真20-①（Ｐ29)】**や**【写真23（Ｐ30)】**のように、自己の目標を達成しながら、仲間へ正確なパスをつなぐ動きが見られた。さらに、**【資料26】**のように抽出生チームの学習前後におけるゲーム分析によると、伸び率の高まりが明らかである。

また、段階終了後のアンケート**【資料24：項目３】**では、生徒全体の９４．２％が「はい」「だいたい」と答えた。その理由と具体的内容を集約すると**【資料25-③】**のように【対応した動き】の習得がうかがえる。

尚、「その他」の理由からは「実践で動きが理解できる」「協力できる」という内容があげられており、【協同・意識した動き】にも有効に働いていたことがうかがえる。



【資料25-③：段階終了後アンケートの回答理由と内容】



【資料26：学習前後のゲーム分析】

〈サービス成功率〉
・サービスの成功数をチームのサービス回数で割った数値

〈接触率〉
・一回の攻撃に３回ボールに触れることができる。そこで、チームのパス成功数を「チームの攻撃回数×パス３回」で割った数値

〈ラリー率〉
・１往復で１ラリーとし、ゲーム全体でのラリー数をサービスを行ったチームの攻撃回数で割った数値

※学習前後のゲームでは、試合時間の違いと対戦相手の違いから伸び率の単位をポイントで表す

以上のことから、技能の活用段階において、活動マニュアルカードを活用したチームでの動きを確認する学習を仕組んだことは、目指す生徒像に迫る上で有効であったと考える。

５　終末の段階（第１２時）

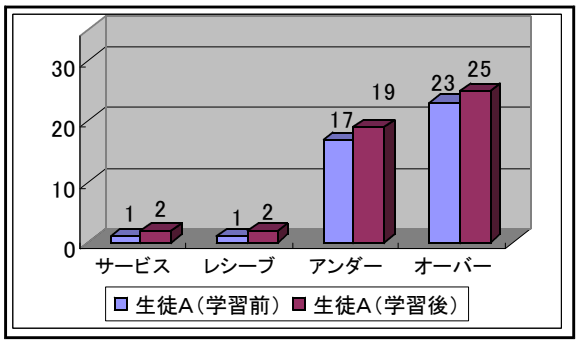
この時間は、以下のような学習のまとめを行った。

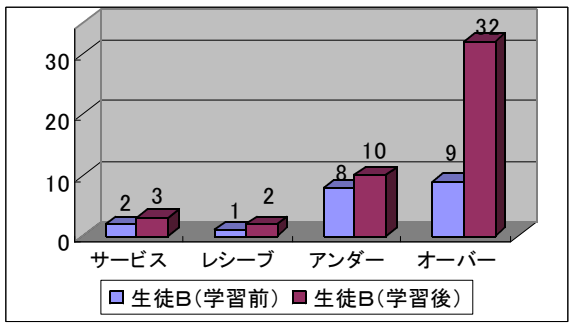
①ペアで習得シートの項目を確認する。
②スキルテストをする**【写真25】【資料27・28】**。
　ア　アンダーハンドサービス、
　イ　レシーブ、
　ウ　直上アンダー・オーバーハンドパス
③単元のふり返りをする。
　ア　事後アンケート**【資料29・30】**
　イ　バレーボール学習の感想
【資料34（Ｐ37）・35（Ｐ38）】

【写真25：直上パスで回数を数える生徒Ｂの様子】

導入の段階で行ったスキルテストとアンケートの結果**【資料11-①②（Ｐ15）】**を終末の段階と比較した。スキルテストにおいては、**【資料27】**のような満足できる結果が得られた。

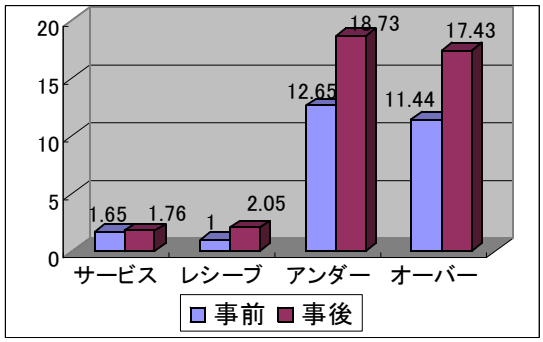
《スキルテスト項目》
○サービステスト：アンダーハンドサービスで、３本打って相手コートに何本入るかを測定
○レシーブテスト：３本のサービスをセッターに何本パスができるかを測定
○直上パステスト：１分間で何回連続の直上パスができるかを測定（オーバー、アンダー）





【資料27：抽出生（生徒Ａ・Ｂ）における学習前後のスキルテスト結果比較】

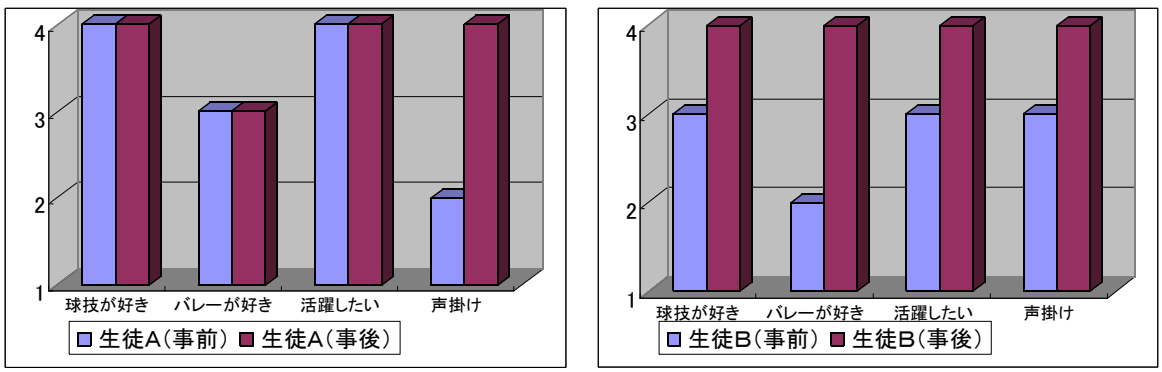
また、生徒全体の学習前後のスキルテスト結果においも**【資料28】**のように、伸びが確認できる結果が得られた。また、学習の各段階で実施した「対人パス**【資料16（Ｐ22）】**」「三角パス**【資料21（Ｐ28）】**」「ボールの接触率**【資料26（Ｐ33）】**」から考えても、生徒は確実に個人的・集団的技能を高め、ゲーム感覚を養い、バレーボールのゲームに活かすことができたと考える。スキルテストの項目にはない、「スパイク」についても多くのゲームの場面で見られるようになり、技能の高まりは明かであった。



【資料28：事前・事後スキルテスト結果比較】

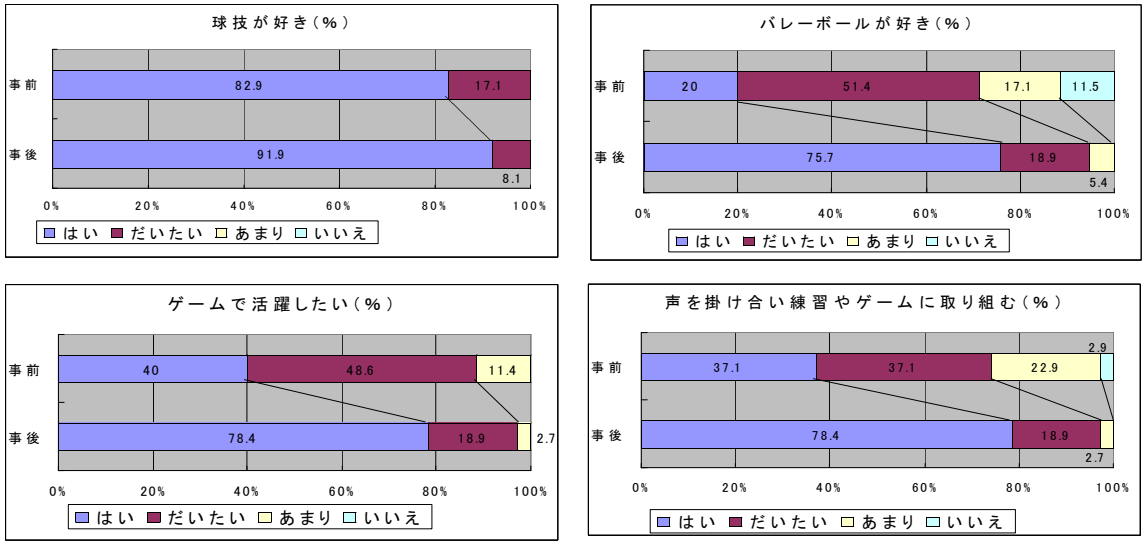
さらに、抽出生（生徒Ａ・Ｂ）における学習前後のアンケート結果によると**【資料29】**のように、どの項目においても満足できる結果が得られた。

《アンケート項目（抜粋）》　（はい：４、だいたい：３、あまり：２、いいえ：１）
　①体育の授業では、球技の学習が好きです
　②バレーボールの学習は好きです
　③ゲーム（試合）で活躍したいと思います
　④声を掛け合いながら、練習やゲームに取り組みます



【資料29：抽出生（生徒Ａ・Ｂ）における学習前後のアンケート結果比較】

また、生徒全体における学習前後のアンケート結果によると【資料30】のように大きな変化が見られた。特にバレーボールに対して８割弱の生徒が好きと答えていた。また、ゲームで活躍したいと答えた生徒も８割弱にまで上がった結果が得られた。



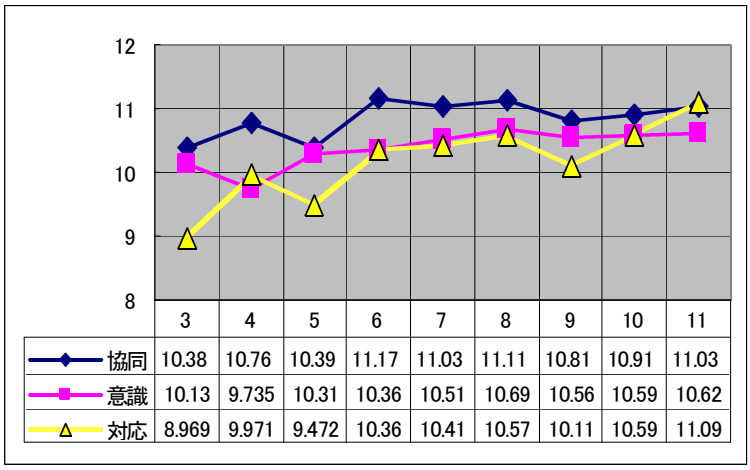
【資料30：生徒全体における学習前後のアンケート結果比較】

Ⅶ　全体考察

１　生徒の変容について

（１）学習の反省（個人ノート）から

目指す生徒像毎に、生徒の行動目標を示したアンケート（４段階評価）の結果を集約し、その合計数を【資料31】のグラフにまとめた。



	3	4	5	6	7	8	9	10	11
協同	10.38	10.76	10.39	11.17	11.03	11.11	10.81	10.91	11.03
意識	10.13	9.735	10.31	10.36	10.51	10.69	10.56	10.59	10.62
対応	8.969	9.971	9.472	10.36	10.41	10.57	10.11	10.59	11.09

【資料31：学習の反省における生徒の変容】

【協同した動き】
①協力して、仲間と練習・ゲームに取り組んでいる
②仲間にｱﾄﾞﾊﾞｲｽしながら、練習にくり返し取り組んでいる
③仲間にｱﾄﾞﾊﾞｲｽしながら、ゲームに取り組んでいる

【意識した動き】
①技能の名称や行い方を理解している
②自分の課題（目標）をもっている
③練習方法を決定・工夫している

【対応した動き】
①できなかったことができた
②練習で連携プレーができた
③ゲームで連携プレーができた

【資料31（Ｐ35)】より【協同した動き】【意識した動き】【対応した動き】は互いに影響し合いながら高まっていったことが分かる。特に【協同した動き】と【対応した動き】については、終始強い相関関係が見られた。また、【意識した動き】と【対応した動き】についても単元の後半にその関係の強さがうかがえた。

全体的には、３つの動きとも右肩上がりの傾向にあるが、４時間目には、【意識した動き】の低下が見られた。これは、自ら課題や練習方法を決定するなどの不慣れな学習スタイルに戸惑いがあったためだと考える。しかし、【協同した動き】と【対応した動き】については高まりが見られた。これは、ペア学習を意図的に仕組んだことや前時の一斉学習によって得られた知識や技能を活用し、協力した練習を行うことができたためだと考える。

５時間目では、【協同した動き】と【対応した動き】の低下が見られた。これは、個人的技能の習得段階のまとめとして行ったタスクゲームの内容が高度であったため、的確なアドバイスができなかったり、習得した個人的技能が十分に発揮できなかったりしたためだと考える。

９時間目には、【協同した動き】【意識した動き】【対応した動き】ともに低下した。これは、これまでの個人的・集団的技能習得のためのペア・トリオ学習から、習得した技能を活用し定着を図るチーム学習（リーグ戦：６対６）に変わった初めての時間であったためだと考える。当初は、学習の進め方に戸惑いが見られたものの、徐々に学習の進め方にも慣れ、次時からはいずれも向上が見られた。

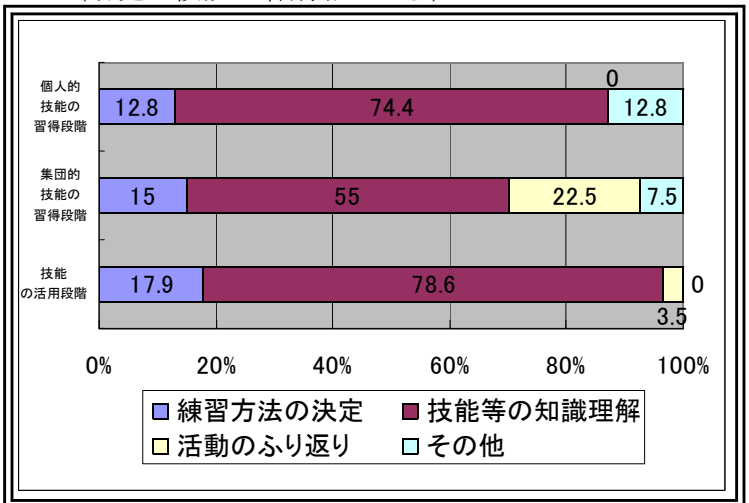
このように３つの動きは互いに影響し合いながら高まっていく傾向にあり、仲間との【協同した動き】を土台に【意識した動き】が活性化し、【対応した動き】が高まったと考える。

以上のことから、活動マニュアルカードを活用した単元構成の工夫を仕組んだことは、相互作用によって【協同した動き】【意識した動き】【対応した動き】を高め、「仲間との動き」を習得する生徒を育てる上で有効に働いたと考える。

２　手だての有効性について

（１）活動マニュアルカードの活用について（研究の仮説：着眼点Ⅰから）

活動マニュアルカードについて「段階終了後アンケートの回答理由と内容」**【資料15-②、20-②、25-②（Ｐ21、27、33)】**を各段階毎に比較し、その変容を分析すると**【資料32】**のように、各段階で「技能等の知識理解」に有効であったことがうかがえる。また、段階が進むにつれて、「練習方法が決定できる」という内容の増加や「活動のふり返りができる」という内容も見られ、活動マニュアルカードを活用し、知識の習得と課題や練習方法を自ら取捨選択し決定していく学習方法が有効であったことがうかがえる。さらに、形式的操作段階（自己編集能力・計画的思考　※Ｐ４）にあたる生徒の意識発達に応じた活動マニュアルカードが学習に取り組む生徒の知識・思考・判断を支援していたと考える。



【資料32：段階終了後アンケートの比較（意識した動き)】

以上のことから、活動マニュアルカードの活用を仕組むことは、生徒の「知識、思考・判断」を高めることにつながり、【意識した動き】を習得させ、「仲間との動き」を習得する生徒を育てる上で有効に働いたと考える。

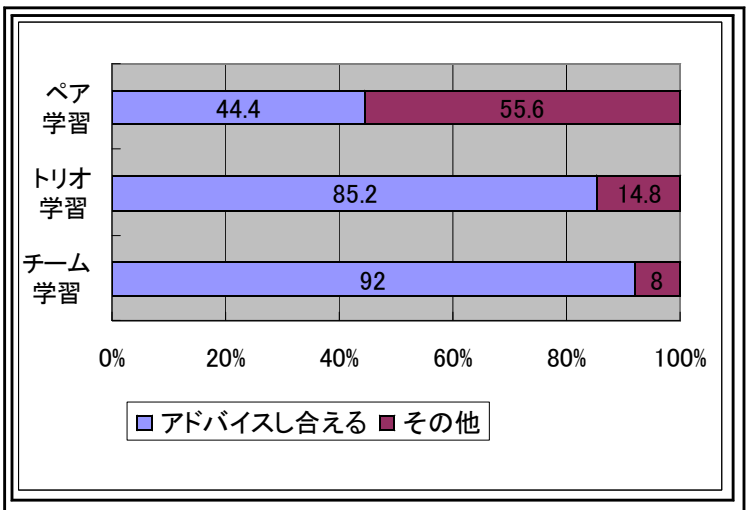
（２）単元構成の工夫について（研究の仮説：着眼点Ⅱから）

①ペア・トリオ・チーム学習について

ペア・トリオ・チーム学習について、「段階終了後アンケートの回答理由と内容」**【資料15-①、20-①、25-①（Ｐ21、27、32)】**を各段階毎に「アドバイス」に着目し、その変容を比較分析すると**【資料33】**のように、段階が進むにつれて、「アドバイスし合える」という割合が増え、チーム学習終了後は９割以上を占めていた。

このことから、ペア・トリオ・チーム学習を取り入れたことは、仲間と協力して練習やゲームに取り組むことができるコミュニケーション能力や学ぶ態度の習得に有効であったことがうかがえる。

以上のことから、ペア・トリオ・チーム学習を仕組むことは、生徒の「態度」を高めることにつながり、【協同した動き】を習得させ、「仲間との動き」を習得する生徒を育てる上で大変有効に働いたと考える。

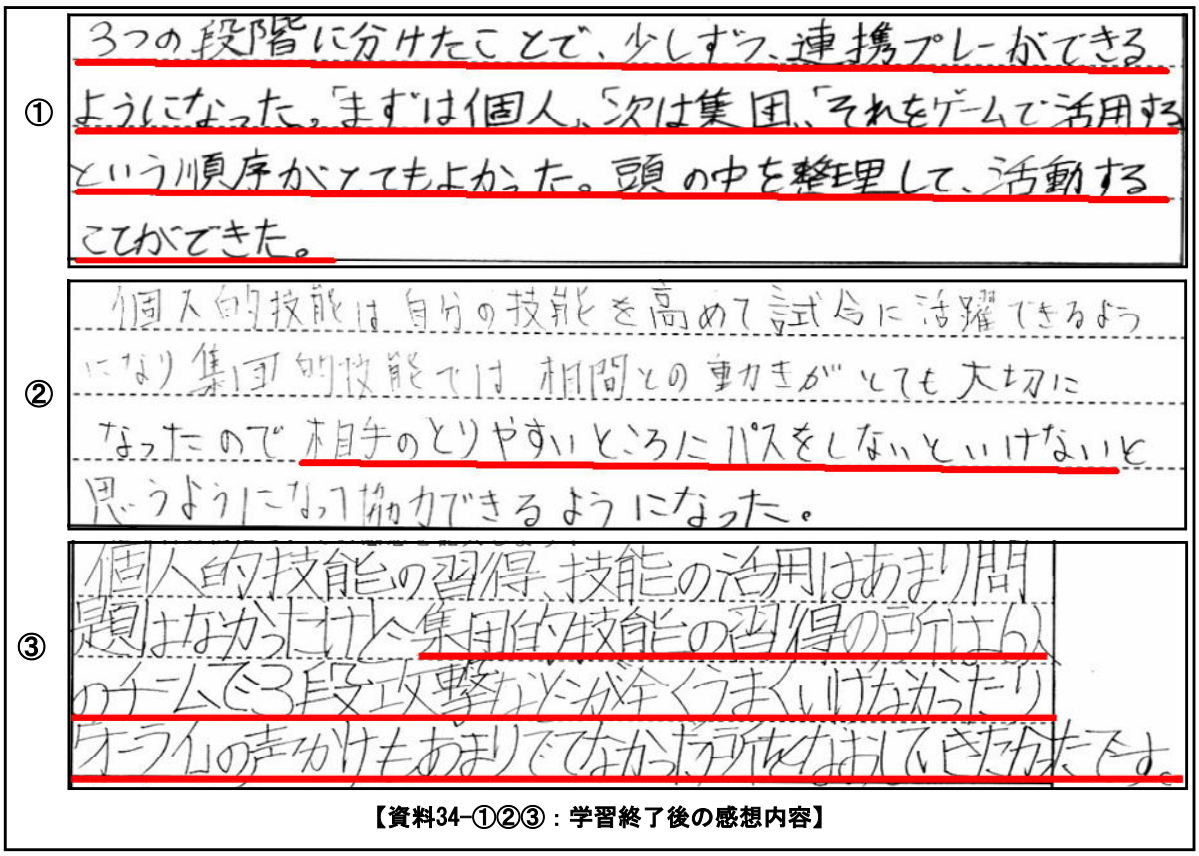


【資料33：段階終了後アンケートの比較（協同した動き）】

②「個人的技能の習得段階」「集団的技能の習得段階」「技能の活用段階」の設定について

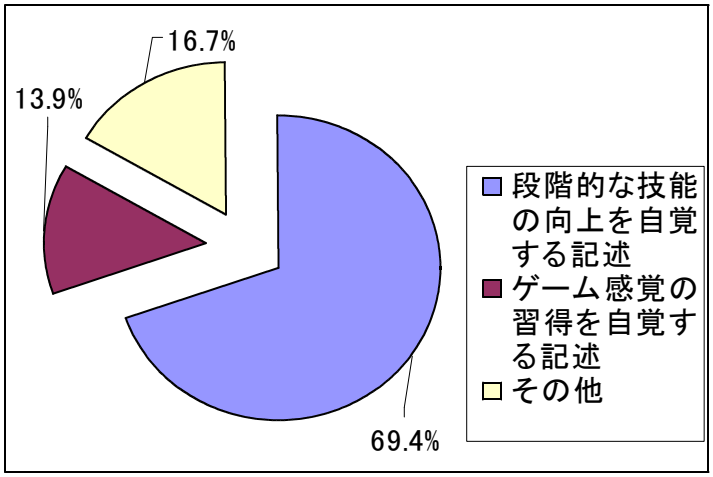
生徒Ｂの感想内容を分析すると、「人とパスを回せました」**【資料13（Ｐ20）】**という単純なパス技能の習得に関する記述から、「レシーブ・トス・スパイクの順でうまくなっていこうと思った」**【資料18（Ｐ26）】**という仲間と連携したパス技能の習得に関する内容に変容していった。さらに、**【資料23（Ｐ31）】**では、「試合のとき、うまくフロントセンターに返せた」というポジションを意識した組織的なパス技能の習得に関する記述が見られ、段階的な思考の流れに応じたパス技能の習得がうかがえる。

また、学習終了後に３つの段階に分けた学習方法について感想を記入させたところ、**【資料34-①】**のように、「個人、集団、ゲームで活用という順序によって、少しずつ連携プレーができるようになった」「頭の中を整理して活動できる」という記述が見られ、段階的な学習を仕組んだことの有効性がうかがえる。**【資料34-②】**では、「個人的技能を高めれば、試合で活躍できるようになる」という思考段階から、「集団では仲間との動きが大切になる」という思考段階に発展していったことが分かる。**【資料34-③】**からは、集団的技能の習得のためには、声かけなど「仲間との動き」を意識する必要性を感じるようになったことがうかがえる。



【資料34-①②③：学習終了後の感想内容】

さらに、生徒全体の感想を記入された内容ごとに分析・集約すると【資料35】のように、段階的に技能を高めていったことがうかがえる。「ゲーム感覚の習得」については、１３．９％となっているが「段階的な技能の向上」の中にも「ゲーム感覚」に関する内容も含まれており、合わせて考えると８３．３％の生徒が段階的な学習の有効性を記述していることが分かる。



【資料35：学習終了後の感想内容の分析・集約（生徒全体）】

以上のことから、生徒の思考の流れに応じた段階的な学習を仕組むことは、生徒の技能を高めることにつながり、「ゲーム感覚」を養いながら【対応した動き】を習得させ、「仲間との動き」を習得する生徒を育てる上で有効に働いたと考える。

Ⅷ　研究のまとめ

活動マニュアルカードを活用した単元構成の工夫を通して、【協同した動き】【意識した動き】【対応した動き】の習得を目指してきた。生徒はこれまでに経験のない学習方法であったが、学習を積み重ねていくことで、以下のような成果と課題が明らかとなった。

１　成　果

（１）単元構成の工夫として、「個人的技能の習得段階」「集団的技能の習得段階」「技能の活用段階」の３つに分け、段階に応じた「ペア・トリオ・チーム学習」を仕組んだことによって、段階的に技能を習得させるとともに、「ゲーム感覚」を養わせることができた。

（２）「活動マニュアルカード」の活用を仕組んだことによって、自己の課題や目標、練習方法等を明確にし、学習の方向性をもたせることができた。

（３）単元構成の工夫として、「ペア・トリオ・チーム学習」を設定したことによって、アドバイスを掛け合いながら協力して練習やゲームに取り組ませることができた。また、コミュニケーション能力を養うことにもつなぐことができた。

（４）「仲間との動き」を習得し、仲間との連携によってラリーを継続させる『中期』の「動ける体」を育成することができた。

２　課　題

（１）課題や目標に応じた練習方法をより適切に選択・決定させるために、学びシート（活動マニュアルカード）のさらなる工夫が必要である。

（２）習得した技能をさらにゲームの中で活かすために、技能の活用段階（チーム学習）における発展的な学習内容の充実（フォーメーションによるポジショニング等）が必要である。

＊　引用・参考文献

・文部省　「中学校学習指導要領解説　保健体育　編」　平成 10 年 12 月
・文部科学省　「中学校学習指導要領解説　保健体育　編」　平成 20 年　7 月
・木村清人・戸田芳雄　編著
「中学校　新保健体育科授業の基本用語辞典」　明治図書出版　平成 12 年 10 月
・松田岩男・宇土正彦　編集　「学校体育用語辞典」　大修館書店　平成 13 年　2 月
・多田俊文 編著　「こころの発達と教育」　八千代出版　平成　8 年　5 月
・佐藤　豊　談　「体育科教育：新学習指導要領と体育（座談会）」　大修館書　平成 20 年　6 月
・杉原　隆　著　「運動指導の心理学」　大修館書店　平成 15 年　9 月
・高梨　泰彦 著　「バレーボール　試合に強くなる戦術セミナー」　実業之日本　平成 20 年　6 月
・高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖　編著
「体育科教育学入門」　大修館書店　平成 14 年　4 月
・松田岩男・森昭三・青山英康　他 19 名　著　「中学保健体育」　学習研究　平成　4 年　1 月
・吉田茂・三木四郎　編著　「教師のための運動学」　大修館書店　平成　8 年　4 月